

妖怪の駒取り

ボルメテウスさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪魔には悪魔の駒。天使には御使い。他の種族を転生させるシステム。

だが、それとは別にもう一つ、とあるシステムがあった。

妖怪の駒。

将棋を模したその駒は、埋め込んだ相手を自身の配下にする事ができる。

そして、将棋を模した事で手に入れた機能もあった。

そんな妖怪の駒を手にした1人の妖怪による妖しい物語。

こちらの活動報告で、募集しています。

皆様の応募、お待ちしております。

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||295139&uid||45956>
TrinArtで作成した挿絵を使用しています。

目次

銀色は妖しく笑う（挿絵あり）	1
金色の吸血鬼（挿絵あり）	9
馴染み深い九尾（挿絵あり）	15
砂浜の蜘蛛（挿絵あり）	19
その配下、問題児	22
知識の魔女	28
嵐の精霊（挿絵あり）	33
依存の巫女	40
勝ち気な巫女	46
悪魔の黒猫	51
鬼の執事	56
破天使	61
妖怪退治屋の配下	65
白妹	69
小さな狩人	73
妖怪天使	78
狸の忍者	83
彼岸花	87
未来のウサリア	92
天使と悪魔	95
蜘蛛服の猫	99

銀色は妖しく笑う（挿絵あり）

京都で、最近建造した屋敷で住んで、どれぐらい経つのだろうか。いや、そもそも俺がここに住んでからどれくらいになるのか。まあそんなことはどうでもいいか。

ただ言えることは、俺はここに住み始めた時、こんなに長く住むことになるとは思っていなかった。

ただ、気付いたらもう何年も住んでいるような気がする。

「それにしても、最近面白い事はほとんど起きないな」

そう呟きながら、目の前にある月を見ながら、手元にある将棋の駒を見つめる。

本来ならば、将棋の駒の数は20。

しかし、その手元にある駒の数はその半分程度。

だが、それは無くした訳ではない。

「さて、次はどうするか」

そして俺は、再び将棋盤と向かい合う。

そう考えていた時だった。

インターホンが鳴った。

普段、客人など来ないはずの屋敷では珍しい。

一体誰が来たんだ？　と思いつつ、玄関へと向かって扉を開ける。

ここは屋敷という事で、入り口は立派な物となっている。

そんな入り口前には1人の女性がいた。

長い銀髪をポニーテールにし、眼鏡をつけている。

一目で知的なイメージをさせる女性である。

「んっ、今日は余裕があったのか、グレイフィア」

その人物について、俺は知っている。

「ええ、お久しぶりです、主」

そう、笑みを浮かべながら、答えた。

彼女の名はグレイフィア・ルキフグス。

裏の世界では有名なサーゼクス・ルシファアの女王であり、悪魔。それと同時に俺の配下の1人である。

「今日は大丈夫だったのか？」

「サーゼクスは、今は仕事で忙しいです。」

私は本日はこちらのサーゼクス・ホテルの視察という名目で来ました。

リアス様が修学旅行するという事で」

そう、眼鏡でキリツとしながら、答える。

「そうか、だったら、今晚は楽しめるんだな」

それに対して、グレイフィアは笑みを浮かべながら、頷く。

既に俺自身は周知の事実だが、改めて振り返るという意味で思いだそう。

俺は、この京都を支配する妖怪の1人であり、一応は鬼神と呼ばれている。

俺自身は、昔はやんちゃをしていたが、今は戦闘に関してはほとんど関わっていない。

そして、そのやんちゃしていた時期にとある物を造り出した。

妖怪の駒。

日本に来ていた悪魔達から奪った物の一つである。

これを使えば、他の生き物を悪魔に変える事ができるらしい。

そして、当時の俺はそれを面白く思い、改造した。

結果、造り出した代物が妖怪の駒。

向こうがチェスに対して、こちらは将棋の駒だ。

悪魔の駒の要素を少し加えただけだが、これには悪魔の駒にはない機能が一つある。

駒それぞれの特性などは悪魔の駒を参考に造られているが、その最大の特徴は『奪駒』である。

これは、他の存在を主としている者に対して、屈服させる或いは魅了した場合、自身の配下に加える事ができる。

妖怪の駒は基本的に化ける事を得意としている為、相手の主に奪われた事を悟られる事はない。

さらには、自身の意思で『奪駒』した配下を呼び出す事ができる。元々、妖怪とは、形が曖昧なのが多い。

グレイフィアもまた、かつてとある戦いで俺と戦い、屈服させた。そして、配下になった。

妖怪と悪魔の違いは曖昧という事で、未だに浮気はバレていない。そして、こうして会っている事も、バレていない。

「それにしても、わざわざ変装する必要はあったのか？」

「ふふっ、たまにはね」

そう俺の軽口に対して、グレイフィアは笑みを浮かべる。

「けど、まあ、確かに良いな、その格好。」

でも今日の気分はそれじゃないんだよなあ」

「そう言う」と

「お前の旦那の前での格好だよ」

「意地悪な人なのね。」

まあ良いわ」

その言葉と共に、彼女はそのまま着替える。

先程までのスーツ姿から一変、クラシックなメイド姿。

さらには、両サイド三つ編みとなっている。

その事に、俺は笑みを浮かべる。

布団に寝そべりながら、こちらを見つめるグレイフィア。

彼女を知る者ならば、普段は決して見る事はないだろう光景を目にしたが、俺はゆっくりと服を脱いでいく。

「……………」

そんな俺を見て、彼女は息を飲むように喉を動かした。

緊張しているのか？　と思えば、そうではないらしい。

グレイフィアは、これから起こる事に期待してか、胸元に手を当てていた。

その様子から察するに、どうやら彼女はこの行為に慣れているようだ。

しかし、それでも緊張の色は隠しきれていない。

彼女の方も、それなりに楽しみにしてくれているという事だろうか。

だとすれば、こちらも気合を入れなければならぬだろう。

まずは軽く挨拶代わりだ。

「……それじゃ、やるよ」

「っ!？」

耳元で囁くように言うと、ビクリと身体が震えた。

ふむ、これは面白い反応だな。

普段の彼女からは想像できない姿だ。

それにしても、やはり大きいな。

メイド服を脱がせ、そのおっぱいを目の前にして、思う。

思わず生唾を飲み込んでしまうほどだ。

大きさだけでなく、張りも形もいい。

こんなものをぶら下げていれば、さぞかし肩こりに悩まされる事だろう。

だが、それがいい！ その素晴らしいおっぱいを両手で鷲掴みにする。

すると、「んっ……」という声と共に痙攣する。感度は良好といったところか。

続いて、乳首を指先で摘まんだり転がしたりしてみる。

「……っ!？」

やはり、かなり敏感なようだ。

これなら存分に楽しめそうだ。

「ああ、うう……」

少し弄っただけで、甘い吐息を漏らし始める。

それだけ感じやすいということだろう。

次は口の方へと移動し、唇を重ねて舌を差し込む。

そして、ゆっくりと唾液を流し込みながらキスをする。

「……んっ」

流し込まれた唾液を飲み下すと、僅かに眉根を寄せた。
やはり、まだ慣れないのかもしれない。

それでも、拒否する事なく受け入れてくれるのだから、こちらとしては嬉しい限りだ。もっと気持ちよくさせてあげようと思うのだが……。

どうしたものかと考える。

とりあえず、一度イカせてあげるべきかとも思うが、せっかくなのでもう少し我慢してもらおう事にしよう。

まずは、乳首を中心に攻めていくことにする。

口に含んで吸い上げ、歯を立てて甘噛みをして刺激を与える。

同時にもう片方の乳房にも手を這わせて、優しく撫でるように愛撫を行う。

「ふあっ!?!」

一際大きな反応を見せた瞬間を見計らって、思い切り強く吸うと絶頂に達したらしく身体を大きく仰け反らせて痙攣させた。

どうやら軽くイッてしまったらしい。

まだまだこれからだというのに大丈夫だろうか？ そんな心配をしながら一旦胸から口を離れた時だった。

「はあはあっ♡……んくう……ああ、もう、我慢ができませんっ♡」

その言葉と共にそのまま横向きに寝かせて片足を上げて、正常位で挿入する。

「ひゃあん！ おっきいですわ♡」

そう言つて腰を動かして喘ぐ。相変わらず感度が高いようだ。膣内は熱くてトロトロになつている。

まるで搾り取ろうとしているかのように締め付けてくるのだ。

このままではすぐに果ててしまいそうなほどだが、何とか堪える。そして、そのまま激しく突き上げるように腰を動かす。

「ひゃん！ 激しすぎますわっ!」

更にスピードを上げると彼女はまた声を上げた。

彼女の中はもう既に蕩けてしまつていて、とても熱い。それにしてもすごい締めまり具合。

何度も味わっているはずなのに飽きる事がないどころか、毎回新たな発見があるような気がする。

膣肉を掻き分けながら、奥へ奥へと進んでいくと亀頭が何かに触れる感覚がした。

その瞬間、ビクビクつと痙攣し俺を強く締め付けてくる。どうやら子宮口に当たったようだ。しかし、まだ先に進むことはできない。

「ああ……っ」

小さく声を上げるグレイフィア。この反応からして、彼女も限界が近いらしい。

その様子を眺めながら、子宮口に亀頭を擦り付けるように腰を動かすと、彼女は更に高い声で鳴いた。

「あつ……ああっ！　だ、だめですっ！　んっ！」

言葉とは裏腹に、膣内は激しくうねっている。

まるで俺の子種を求めるかのように吸い付いてくるその動きに、思わず射精しそうになるがなんとか堪える。

だがグレイフィアはその刺激に耐えられなかったのか、体を震わせながら果てたようだ。そしてその締め付けで俺も達した。

「……」

「んっ……ふう。今日はこれで終わりですわね？」

俺はそれに対して、首を横に振る。

「あら？　まだ足りないのかしら？」

そう言うと彼女は四つん這いになり尻を向ける。

そして、女性器の中身を、こちらに見せつける。

先程までの行為で、未だに残っている精液がどろっと溢れ出た。

「ほら……まだ残ってるでしょう？　貴方様の出したモノです」

そう言って、誘い込む。

「どうか、この中に、収まらない程の精液を下さいませ……」

俺は彼女の腰を掴むと、一気に貫いた。

「んあっ！　はうっ！」

そしてまた引き抜き、奥まで突き入れる。

「ああっ！　いいいっ!!」

そして今度はゆっくりと引き抜く。

「ひゃうう……そんなゆっくりされたら……んふう……焦れつたくてえ……」

更にもう一度深く突き入れた。今度は腰を引いていく。

その瞬間に彼女は切なげな声を上げた。

そして一気に最奥まで貫くと、彼女の口から歓喜の音が漏れた。

「ああんっ！ はあ……あああっ！」

腰を打ち付ける度に甘い喘ぎ声を上げながら、彼女の体はビクビクツと痙攣する。

何度も繰り返しているうちに、彼女も慣れてきたのか、自ら腰を動かし始めた。

それに合わせてこちらも動き出すと、彼女はさらに乱れ始める。

「あんっ！ いいっ！ もっとお！ 激しくしてえ！」

そう言う彼女の声があまりにも切実で可愛らしく、つつい俺も興奮してしまう。

俺は腰の動きをさらに早める。するとそれに合わせるように彼女もまた喘ぎ声を大きくしていく。そして……

「ああんっ！ イクツ！ イツちやうう!!」

絶頂を迎えた彼女が身体を仰け反らせると同時に、膣内が激しく収縮し、まるで俺の肉棒から精液を全て搾り取ろうとするかのように激しく絡み付いてくる。その快感に耐え切れず、俺は彼女の子宮口に龟头を押し付けたまま、大量の白濁液を放出した。びゅるっ！ どびゅるるるっ！

「あああああっ！」

熱い子種汁が子宮を満たしていく感覚に、彼女は歓喜の声を上げた。そして、最後の一滴まで絞り出そうとするように腰をくねらせてくる。そんな彼女に愛しさを感じながら、ゆっくりと萎え始めた肉棒を引き抜くと、ごぼりと音を立てて秘裂から溢れ出した白濁した粘液がシートに大きな染みを作った。

「んっ……ああ」

名残惜しそうに声を上げる彼女だが、流石にこれ以上は無理だろ

う。それにしても、今日も素晴らしい夜だった。この上ない快楽を得た俺は満足して大きく息をつく。

その俺の隣で仰向けになったまま荒い呼吸を繰り返している彼女の胸元では、汗ばんだ乳房が上下している。その光景だけでも興奮を覚えるのだが……何より目を惹くのはその下半身だ。シーツに広がる愛液と精液の混合体。そして、太股や尻から垂れる白濁した液体。彼女は今し方まで、俺との情事に夢中になっていたのだ。

「んっ……」

彼女がゆっくりと身体を起こす。その際に漏れた艶っぽい吐息だけで、俺はまた興奮してしまう。そんな俺の視線に気付いたのか、彼女は微笑んでくれた。その笑みはとても優しく、慈しみに満ちたものだった。

金色の吸血鬼（挿絵あり）

「詰まるところ、お前様の好みはなんじゃ？」

そう、奇妙な形をしたドーナツを食べながら、目の前にいる幼女、忍野忍が尋ねてきた。

忍野忍。

彼女との付き合いはかなり長い。

鬼と吸血鬼。

同じ鬼という名を持つ者同士。

彼女が日本へと来訪した事をきっかけに戦った。

結果的には、俺は彼女に勝利した。

そして、その際に、俺はそのまま俺の持つ妖怪の駒である金を渡した。

金は、王将に最も近い力を持つ駒であり、様々な力を強化する。

悪魔の駒である女王とは違い、2個あるのも、また特徴である。

そんな忍野忍は数多くいる配下の中でも、こうした猥談を振つてくる者は珍しい。

「なんだ、いきなり」

「何、気になっただけだよ。」

お前様の配下はなかなかバラエティが多いじゃないか。

そのジャンルは多種多様なのだが、お前様の好みは一体何なのか気になっただけじゃよ」

そう俺を揶揄う目的でもなく、ただ純粹な疑問として訊いてくる。

しかし、改めて言われると困ったものだ。

自分の趣味嗜好について考えたことなどない。

だから俺は、正直に答えることにした。

「……特にはないかな」

「ふむ？ それはまた随分と不思議な答えだのう。」

普通、男というものは自分の好きなものを他人にも好きになって欲

しいと思うものじやろう？」

「そんなの知るか。」

俺はその時の気分で決める。一途なんて柄じゃないしな」

それに俺は自分が好きなものを人に押し付けられるほど、自己中心的でもないつもりだ。

まあ、そういう風に思われていたら嫌だが。

「カカカツ、ある意味、お前様らしいといえよう。」

確かに、お前様のような妖怪には押し付けられた方が迷惑かもしれんな。……それでは質問を変えよう」

その言葉と共にドーナツを食べ終わると共に、そのまま布団の上に座る。

「今の儂の姿は、お前様の好みかのう？」

そして、こちらを見上げる。

先程のドーナツの食べカスが口元についたままなのは愛らしさを感じさせるが、やはりその姿は妖艶だった。

「そうだな……」

「どうした？ 遠慮せずとも、思ったことを言えば良いぞ」

そう言っつてニヤリと笑う。

「ああ……。……悪くない」

少し考えてから、答える。
すると、

「ふふっ、ならば、儂に少し飲み物をくれるか？」

甘い物を食べた後は、苦い物を飲みたいからなあ」

そう、俺の肉棒に目を向けながら言う。

「仕方ない奴だな」

その言葉と共に、俺はそのまま肉棒をゆつくりと忍野の唇に近づけていく。

亀頭が触れた瞬間、ピクリと震えるが、それでもそのまま舌を出して、それを迎え入れようとする。

その様子はとても淫靡であり、とても背德的であった。

そのまま、亀頭を口に含ませる。

温かい口内に包まれ、思わず声が出そうになる。そして、ゆっくりと引き抜く。

唾液によって濡れそぼったソレはテラテラと光り輝いていた。忍野は顔を赤くしながらも、今度は竿の部分へと口を寄せる。

裏筋や玉袋などを丹念に舐め回す。

時折漏れ出る吐息混じりの声が興奮を掻き立てる。

亀頭をもう一度口に含み、また離す。

何度も繰り返す内に、段々とコツを掴んだのか、動きが激しくなっていく。

そして、カリ首までを一気に飲み込むように深くくわえ込み、喉の奥の方で締め付ける。

それと同時に尿道も刺激され、思わず射精してしまいそうになった。

しかし、それは何とか耐えきることができたようだ。

忍野は苦しそうな表情を浮かべながらも、口から肉棒を出すことはしない。

むしろ更に激しく動くことで、射精させようとしているようでもあった。

その行為により、限界を迎えた肉棒からは精液が大量に放出された。

当然のように、忍野はそれを全て受け止める形となる。

「んぐう……い……ゴクツ」

喉を動かしてそれを飲む音が聞こえてくる。

その音を聞いているだけで、再び勃起しそうになってしまう。

「ふはあーっー」

ようやく解放された肉棒には、まだ白濁とした液体が残っていた。それを指先で拭うようにして、こちらに見せつけてきた後、それをペロリと舐めた。

「まったく、お主の精液は相変わらず苦いな」

そう言いつつもどこか嬉しそうである。

「さて、次はどうして欲しい?」

妖艶な笑みを浮かべながら尋ねながら、布団の上で寝転がる。そのまま、着物に手を伸ばした忍野は女性器を見せつける。

「ほれえ、ここにお前様のを、ここの中になあ♡」

そう、女性器を俺の方に見せつける。

そう、仰向けで大腿を開きながら、秘所を見せびらかすようにしているのだ。

そして、その状態で手を伸ばしてくる。

そのまま俺の男性器を掴み取り、優しく撫で回してくる。

「ふむう……」

そして、何かを確かめるかのようにしながら、ゆっくりと握ってくる。

「んっ！ あっ！」

思わず声が出てしまう。

そんな俺の反応を楽しむかのように、忍野は笑いながら聞いてくる。

「くつくつく…… どうじゃ? 気持ちいいか?」

俺は答える。

「ああ……」

すげえ、いいぜ……」

忍野はその答えを聞いて満足したのか、更に激しく擦る。

それと共に、肉棒は、ゆっくりと、その膣内へと誘われていく。ずぶずぶと、抵抗なく入っていく。

熱い。

中はとても熱かった。

まるで溶鉱炉にでも入っているかのような錯覚に陥る。

しかし、その熱さに反して、とても柔らかい。

まるで、溶けたチョコレートのような感触だ。

それに、この圧迫感。

奥まで入れれば入れるほど、どんどんと強くなっていく。

亀頭が子宮口にぶつかると同時に、その柔らかさが伝わってくる。

そして、それを包み込むように絡みつく粘膜の感覚も凄まじいものだった。

気を抜くと一瞬で果ててしまいそうなほどの快感だった。

忍野が腰を動かす度に、じゅぷつという音が響く。それに合わせて、接合部からは白い液体が零れ落ちる。

「……ん」

僕はそんな光景を見ながら、声を上げた。

先程、射精したばかりの精液が、僅かに秘部から飛び出る。

それでも、俺は構わずに腰を振った。腰を振る度に、忍野は気持ちよさそうに喘ぐ。

「そこっをつ、もっともっつ♡」

まるで、おねだりをするかのように言う忍野。

同時に、俺の方にも限界が訪れてきた。

しかし、ここで出すわけにはいかない。

まだ我慢しなければならぬのだ。

俺は歯を食いしばりながら耐える。

すると、忍野は俺に向かって手を伸ばしてくる。

その手を握り返すと、そのまま引き寄せられた。

顔同士が接近する。

忍野はそのままキスをした。

舌を絡ませあう濃厚なキス。唾液の交換を行いながらも、お互いの性を擦り合わせるように動かし続ける。

そして――、大量の精液が、忍野の中に注ぎ込まれる。

それとほぼ同時に、忍野も絶頂を迎えたようだった。

ビクンビクンと身体を大きく震わせている。

やがて、射精が終わると、ゆっくりと唇同士を離れた。

「……………ふう」

と、一息つく。

「まったく、お前様は、いつも激しいんじやよ」

そう、彼女は呆れた顔で言った。

「それは褒め言葉として受け取っていいのかな？」

俺は冗談めかして言う。

「まあ、そんなところじやろ」

忍野は俺の言葉に笑って答えた。

馴染み深い九尾（挿絵あり）

俺の元にいる配下の中には昔からの知り合いも確かにいる。イツナも、そんな知り合いの1人である。

元々は、俺と同じく京都にいる妖怪の1人であった。

しかし、力だけは強いが、本人は支配などには興味なかった。

なので、自身の跡を引き継がせた後は俺の配下となって、そのまま隠居のような生活を送っている。

ある意味、忍と同じぐらいに気の合う友人のような感じだ。

そして、敷き布団の上で準備を行っているイツナは妖艶な笑みを浮かべながら、巫女服から見える巨乳をこちらに見せつける。

見せつけている巨乳が、そのまま俺の肉棒を谷間へと近づく。

「……お主も随分と溜まっておるようだろう？ ほれ、こうすると気持ち良いか？」

そう言いながら、イツナは胸で挟んだまま上下に動かす。

その度に彼女の巨乳は形を変えていく。そして時折先端の部分を口に含み舌で転がす。

「うっ！ くう！」

俺は思わず声を上げてしまう。それほどまでにイツナのパイズリは凄かったのだ。

柔らかい乳房に包まれた状態で擦られ、亀頭の先端を舐められる。それだけでも十分な快樂だというのに、彼女は更に追い打ちをかけるように指先で弄ってくる。

そんな責めに耐え切れるはずもなく、射精感がこみ上げてくる。だが、まだ早いと思い我慢する。ここで出してしまうわけにはいかない。

「ふっ、まだ出ないんじゃない。

良いぞ、その分、堪能してくれ」

そういうと、今度は口を使って愛撫してくる。

口に含んで吸ったり、舌先を使いつつ刺激を与えてきたり、まるで搾乳しているかのように激しく動く。

「んっ！ はあ、あっ！」

口から漏れ出る喘ぎ声と共に動きが激しくなる。

その動きと共に、肉棒全体を舐め取るイツナ。舌先が裏筋を刺激し、唇が竿部分を吸い込む。

それだけではなく、空いた手では玉袋まで揉まれていた。

それらの行為によって一気に射精感が高まる。

このままだと、もうすぐ果ててしまいそう。

そう思った時だった。イツナは口を離し、手で肉棒を握る。

「……そろそろ限界みたいじゃな？ いいぞ、存分に出すがよい」

再び、激しいフェラが始まる。それと同時に、強く握られたことにより精液が尿道を通っていく感覚に襲われる。

その快感に耐えることが出来ず、ついに俺は達してしまった。

勢いよく出た白濁色の液体は、イツナの顔や体に飛び散っていく。

「いっぱい出したのう……。私の体がこんなにも汚れてしまったではないか……」

と言いつつも、嬉しそうな表情を見せるイツナは顔についた精液を舐める。

その光景を見て、また勃起してしまいそうになるのを抑える。

「ふむ、まだ元気がありそうじゃな。」

次はどうして欲しい？」

イツナは挑発的な目をしながら言う。その姿を見ただけで興奮してしまう。

正直言つて、この場で押し倒して挿入したいぐらいだ。しかし、ここは耐えるしかないだろう。

「……さつきも言ったけど、俺が満足するまでやらせて貰うよ」

「ふっ……、本当にお前という奴は面白い男じゃな。」

分かった。ならば好きなだけするか」

その一言と共に、俺はそのまま布団の上に寝転がる。

同時に、勃起している肉棒が真上に立つ。

イヅナが女性器を指で広げながらゆつくりと腰を落としていく。亀頭が膣内に入っていると、それだけでも気持ちよかった。

そして、根元まで入りきると彼女は体を震わせる。

少し動いただけでも感じているのか、甘い吐息が漏れ出していた。そんな彼女を見ながら、俺は両手を掴み自分の方へと引き寄せた。それにより、彼女の体は倒れ込み胸同士が密着する形になる。

その際に乳首同士も擦れ合い刺激を与える。

さらに、足を使って股間を押し付けてきたため、先ほどよりも強い快楽に襲われてしまう。

だが、それでも俺は我慢しながら彼女を抱きしめ続けた。

イヅナも必死に堪えているが、声は抑えきれず口から洩れる。

その姿を見ているだけで興奮してしまいそうだ。

そして、俺は彼女にキスをする。舌を入れて絡め合う濃厚なものだ。

すると、それに応えるように彼女も絡ませてくる。

互いに求め合っているような感覚に陥りながらも、ピストン運動を続ける。

動く度にイヅナは喘ぎ声を上げ続け、それが余計に興奮させていった。

「ああ……んっ！ はあ……んう……」

「くっ……そろそろ出すぞー！」

限界に達しそうになった瞬間、俺は勢いよく射精した。

それと同時に絶頂を迎えたのか、彼女は背中を大きく反らす。

そして、秘部から愛液が流れ出しシートを濡らしていった。

「あっ、熱い……お主の熱を感じるぞお……」

俺が彼女の膣内に出している間にも、腰を振り続けていたため奥まで精液が届くことはなかった。

しかし、それでも快感を感じたのかそのまま布団へと倒れてしまった。

「はあ……はあ……気持ちよかったか？」

「うむ……私も満足じゃ」

そう言いながら俺の首に手を伸ばしてきたためキスをする。
お互いに舌を出し合って絡め合う。
長い間、互いに求め合い、互いの唾液を交換しあう。

砂浜の蜘蛛（挿絵あり）

美しいアルビノの少女。

ただし眼球だけはひとつの瞳の中に五つの虹彩が特徴だ。

その少女の名は白織。

女郎蜘蛛と土蜘蛛の間に出来た変異体。他の蜘蛛型妖怪違う特徴の姿や膨大な魔力を有するが故に周りから蔑まれ、迫害された過去を持つ。そのため口数が少なくなり、単語や要点しか話さないコミュ障な人物だ。

その為、俺の配下になるまでは一人で暮らしていたらしい。

そんな彼女だが、見た目に反してかなりのお色気キャラでエロいことに興味津々なお年頃である。

「これも、なかなか……」

そして今は俺を誘惑して楽しんでる最中だ。

彼女は今、黒地にビキニを身に付けている。

おかげで彼女の豊満なバストがかなり強調されており、正直言ってもエッチだ。

「ねえ……そろそろ私も限界なんだけど」

そう言う和白織はこちらに尻を突き出し、そのままゆっくりと腰を落としていく。すると水着越しに俺の肉棒と彼女の秘部が擦れ合い、思わず声が出そうになる。ちなみに俺は現在、白織と同じ岩場に隠れており、そこから彼女に覆い被さるように四つん這いになっていた。そのため俺の顔の真下に、彼女の大きなお尻があるという体勢になっているのだ。

さらに彼女は自ら俺に挿入しようとしているらしく、水着の股布部分横にずらしている。つまり今にも彼女の膣内に入ってしまいそうな状況にあるのだ。このままではまずいと、必死に耐えようとするのだが、この体勢のせいで上手く抵抗出来ない。むしろ彼女が少し動く度に刺激されて我慢するのが難しくなっている。

「ああ……早く……ちようだい？」

どうやら白織は完全にスイッチが入っているようだ。既に目はトロンとしており、発情したメスのような表情を浮かべている。

「仕方ないな、本当に」

俺は覚悟を決めると、自分の欲望に従い目の前の大きな桃にむしやぶりついた。同時に彼女の尻を強く鷲掴みにする。柔らかさと弾力を兼ね備えた彼女の尻は極上の触り心地であり、ずっと揉んでいたくなるほどだ。

「ひゃうっ！ あっ、あんっ！」

その刺激により彼女は軽く絶頂を迎えたのか、身体を大きく震わせる。それと同時に大量の愛液が溢れ出てきたようで、彼女の太腿を伝って落ちていった。

「もうイツちやったのか？」

「ごめんなさい……でもあなたが悪いのよ？ あんな風にされれば誰だって……」

言い訳するように呟く白織だったが、今の俺には彼女を責める余裕はない。何故なら俺もまた限界を迎えていたからだ。しかし流石にここで出すわけにはいかない。なのでどうにか堪えようと試みるが、やはり我慢しきれないだろう。何せ先程から俺の肉棒は熱を帯びて硬度を増しており、いつでも発射可能な状態となっているのだから。それなのに彼女だけ先にイかせてしまったのは悪いと思っている。だからこそ今回は自分が耐える番だと思ったのだ。

「ほら、続きをするぞ」俺は一度立ち上がると今度は岩場の上に登る。そして仰向けになり寝転ぶと、自分の股間を見せつけるように開いた。

「来いよ白織、今日もたっぷり可愛がってやるからな」

「ふふっ、そんなこと言って良いのかしら？ 私の方があなたのこと満足させられるんだからね？」

白織は妖艶な笑みを浮かべると、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。そしてそのまま俺の上に跨るように座ると、互いの秘部を密着させた。彼女の陰毛はかなり濃く、少しざらついておりかなりチク

チクとする。その刺激で思わず声が出そうになったがなんとか抑え込んだ。そして彼女の方はというと、既に準備万端といった様子で濡れそぼっている。そのせいか肌同士が触れ合うだけでぬめつとしており、それがまたなんとも言えない感覚だった。

「ふあ……」白織の方からも気持ち良さそうな吐息が漏れる。どうやら彼女も同じ気持ちらしい。それを確認してから、ゆつくりと腰を動かし始めた。互いに擦れ合い、快感を生み出すために。だがまだ足りない。もっと深くまで繋がりたいのだ。その思いを表すかのように、彼女の細い腰を掴むと一気に引き寄せた。すると亀頭が膣内に入り込み、子宮口を押し上げる。それと同時に彼女はビクンツと大きく身体を跳ねさせると、口からは甘い喘ぎ声を発した。

「あうっ！　そこお……すごい……」

どうやらここが彼女の弱点らしい。ならばとばかりに何度も激しく突き上げていく。するとそれに呼応するかのようにな彼女も腰の動きが激しくなり、より一層興奮が高まってきた。お互いもう限界は近いようだ。そこでラストスパートをかけるべく、さらに強く腰を打ち付ける。すると、やがてその時が訪れた。

「あつ、ダメえ……イクウ!!」

一際大きな声で叫ぶと同時に、白織は盛大に潮を吹き出した。それと同時に俺も果ててしまい、大量の精液を流し込んでいく。それらは入りきらず逆流し、秘部から垂れ落ちるほどだった。

「はあ……いっぱい出たわね」

「お前こそ、かなり飛ばしてたじゃないか。おかげでこんなになっちゃったぜ?」

そう言っただけ俺はまだ勃起したままの肉棒を見せる。すると彼女は顔を赤らめて恥ずかしそうにしていた。だがそれも束の間、すぐいつもの調子を取り戻すと、こちらを挑発するような表情に変わる。

「あら、まだまだ元気みたいじゃない。ならもう一回……」

そう言い、再び行為の続きが行われそうになった。

その配下、問題児

俺には、駒によって、多くの配下はいる。

彼らとはどこか腐れ縁だったら、従順だったり、その関係は様々だ。ただ、その中でも一番過激な関係だと言える人物はおそらくはこいつだと、間違いなく言える。

「今日こそは、覚悟しろよ、旦那あ!!」

そう言いながら、俺に向かつて、勢い良く岩を投げってくる少女。

彼女は、その手には岩を触れていない。

この世界でも、本当に存在するか分からない超能力者。

その持ち主であり、サイコキネシスという能力を持つ明石薫。

「だから、甘いんだよ、お前は!!」

そんな攻撃に対して、俺はそのまま岩を砕き、そのまま拳骨をする。

「痛あ!・旦那、こんな美少女に、拳骨つて、どうなんだよ!」

「うるせえ、毎回毎回、マジな攻撃をする奴にはこれでも足りないぐらいだ」

そう言いながら、呆れながら言う。

「何を言っているんだ。」

私をこういう事をして良いって言ったのは、旦那だろうがよお」

「まあ、確かにそうだけだな」

そう言いながら、目の前にいる明石の言葉に俺は呆れながら言う。

彼女、明石薫との出会いから既に10年以上経っている。

散歩して、偶然だった。

何か強い気配を感じ、見に行く。

それは、当時では超能力を十分に使いこなせていない明石だった。

未だに彼女の事を知らなかった俺は、そのまま明石が家に飛び出した所を見たので、そのまま追いかけた。

その時、泣いている彼女の横に座りながら、話を聞いた。

超能力の暴走で母親に怪我を負わせてしまい、家族と疎遠になった。

それが彼女の言葉だった。

それに対して、俺が思ったのは、人間は面倒だと思った。

「力がなければ、守れずに力を欲する。反対に、力があれば、それが原因で不幸になる。どうせ、お前がその力を拒否しても、変わらないぜ」
「だったら、どうしろって言うんだよ」

そう、怒りを向けた目でこちらを見る。

「だったら、ついてこいよ。」

てめえ程度のガキの力、化け物である俺を越えられない事を教えてやるよ」

そうして、俺と明石による殺し合いが始まった。

最も、ガキを殺すつもりはなかった俺は、明石に対しては攻撃は仕掛けなかった。

被害も何も無い無人島での戦い。

それは、明石にとっては力を存分に使う事ができる場所だった。

だからこそ、力の加減が徐々に覚える事もできた。

どうすれば、疲労しないのか。

どうすれば、戦いやすいのか。

そうした、命懸けの戦いの中で、俺は明石の才能に笑みを浮かべる。

そうした死闘から1週間、俺は明石を連れて、彼女の家へと連れて行く。

久し振りの母親との再会には、無人島での殺し合いの時のような迫力はなかった。

むしろ、ガキらしい感じがした。

しかし、再会した彼女と母親との間には、そんな心配は吹き飛んだ。

明石の事を心配しており、疎遠になった事を謝った。

そうした事によって、二人の間には確かな親子の絆があった。

それと共に。

「旦那！」

「旦那って、俺の事か？」

俺はそう言いながら、返答する。

「旦那は確か、妖怪で、配下にできるんだよな」

「まあ、なれるけど」

「だったら、私を配下にしろ」

「はあ、ガキが何を言っているんだ」

「決まっているだろ、下剋上だよ」

「下剋上だあ?」

俺はその言葉に首を傾げる。

「あの戦いで、私は旦那よりも下だって、分かった。

だったら、私が旦那よりも強くなりたい。

そして、強くなった時には、旦那は私の物になって貰う」

「ほう」

これまで様々な奴がいたが、ここまで宣戦布告をしてくる奴は初めてだ。

それには俺は思わず笑みが零れてしまう。

「良いだろ、だったら、俺を越えてみる!」

そしたら、くれてやるよ、俺の全てを」

「言ったな、旦那!」

その時から、明石との関係が始まった。

さすがにガキに手を出す事はなかったが、この10年の間、彼女は立派に成長した。

今では確か高校生ぐらいだ。

そして、なぜか裏京都の番長のような存在になっている。

そんな明石だが既に性行為に興味を示している。

それと共に彼女の相手を行うようにもなっていた。

明石の唇から広がるキス。

それは、彼女自身も感じたのか、その火照りが頭にまで届き、緊張がほぐれてゆく。

込み上げる甘い痺れに、明石は身を委ねると、そのまま俺に密着し、近くに寄り添っていく。

「んちゅ……んゆ……んうつつ!」

そう、触れ合った瞬間、俺の肉棒が擦りつけられた瞬間、明石は身を硬くし、思わず目を見開き、顔を真っ赤に染める。

「んじゅう、ちゅぱっあむっ」

頬を赤くしながら、普段の強気な態度からは考えられない程に照れているのか、明石はそのまま唇を寄せる。

頬や耳をくすぐるように撫で、唇を重ねる。

その度に明石は身を震わせる。そして、彼女はゆっくりと口を開き、舌を伸ばす。

俺はそれを迎え入れるようにして彼女の小さな舌を迎え入れた。絡め合うようにして互いの唾液を交換していく。

まるで恋人同士のように抱き合いながら濃厚な接吻を言い続ける。

互いに呼吸を忘れて貪り合うような接吻を繰り返す中、不意に明石の手が俺の下半身へと伸びてきた。

その手つきはぎこちないものだったが、ズボン越しに触れる指先から、徐々に大胆な動きを見せ始める。

最初は触れるか触れないか程度だった指先がやがて股間の膨らみへと押し付けられるようになり、次第に撫で回すような仕草へと変化していった。

その手の動きは明らかに性欲を喚起させるものであり、俺は息を荒げてしまう。

それに気付いた明石もまた興奮した面持ちになりながらも、どこか余裕のある笑みを浮かべる。

その表情には羞恥心などは一切なく、ただただこれから訪れるであろう快楽に期待しているようであった。

そんな明石を見て、俺は無意識のうちに彼女の身体を抱き寄せていた。

明石はそのことに一瞬驚いた様子を見せたものの、すぐに笑みを見せ、より積極的に行為を進めていく。

明石の手がパンツの中へ入り込み、直に触れてくる。優しく、ゆっくりと撫で回すように触られると、俺の分身はあつという間に怒張ってしまう。

すると、明石の顔が一層赤くなり、少し戸惑った様子を見せる。

「やっぱり、旦那のは、でかいな」

恥ずかしさを隠すためか、いつものような言葉を口にする明石だ

が、その声音は上ずっており、明らかに動揺していた。

「そろそろ、いいよな?」

そう言つて明石は自分の着衣を脱いでいき、下着姿になる。

そして、俺の上に跨るような体勢になると、そのまま腰を落とし、俺の一物を秘所に押し当てる。

既に準備ができており、愛液によってヌルヌルになったそこは難なく一物を飲み込んでいく。奥まで入ったところで明石は大きく息を吐きだす。

膣内は柔らかく、それでいてしっかりと絡みついてきて離そうとしない。

それだけでも十分に気持ちが良いのだが、明石はそれに加えて俺にキスを求めてきた。

こちらとしては断る理由もないため応じるが、その間も明石の方は小刻みに体を揺らしており、快感を得ようとしてくる。それに負けじとこちらも動きを合わせて突き上げる。

下から突き上げられることで明石の口からは甘い声が漏れ始め、それと同時に膣内がきつく締まっていく。

「んっ……くぅ……あっー!」

明石は身体を大きく仰け反らせるとそのままぐったりとした様子で倒れこんでくる。

しばらく荒い呼吸を繰り返していると、ふっと力が抜けたかのようになり倒れこみ、こちらにもたれかかってきた。

始めての行為に腰が抜けたのか、しばらく動けないようだ。

とはいえ、俺の方は未だ満足できていないため、それを察した明石は再び体を起こし、騎乗位の体勢になる。そして再びゆっくりと腰を落とす。

今度は最初から激しく動くのではなく、前後に擦り付けるように動かし始める。先ほどとはまた違った刺激を与えられ、思わず射精しそうになるがなんとか堪える。

だが、明石の動きは更に加速していき、どんどん激しさを増していく。

それに伴って俺の限界も近づいていく。

「明石！ もう出るぞ!!」

そういうと明石の方はさらに激しくなり、最後は一気に速度を上げて一番奥まで押し込んできたと同時に果てた。

同時に明石も絶頂を迎えたようでビクビクと痙攣しながら倒れこむ。

まだ明石の中には精が残っているが、明石が動かなくなってしまう以上、どうすることもできない。

とりあえず、俺は明石を抱き寄せて頭を撫でることにした。

すると、顔を赤くする。

「まったく、生意気なガキだったお前が今ではこんな風になっているなんてなあ」

しみじみといった感じで言うと、明石は「うるさい」と言いつつも俺の胸に顔を埋めてきた。

普段は強気な態度でいる明石が見せる弱々しい一面。それを見ると、どうしても可愛く思えてしまう。

普段とのギャップがあるからこそ、こういうところを見せてくれると余計に嬉しく思う。

だからなのか、俺は明石の髪を撫でる。

すると、明石は小さく身震いし、「子供扱いするな」と言っただけ俺の手を払いのける。

しかし、すぐに抱きついて顔を押し付けてくる。その様子が可愛くて、俺も明石を抱きしめて頬を寄せる。

知識の魔女

俺の配下は忍を始めとして、海外の住人もいる。

その中でも、ドロシーは魔法使いとしての知識で様々に支えてくれる。

俺も知らない神話などを教えてくれる事もあり、助かる事が多い。ピンク色のロングヘアをおさげにまとめた少女は、深いスリットの入った黒いドレスを着ていて、ドレスと同色のブーツを履いた脚が綺麗な脚線を描いている。

十代半ばほどの少女は顔つきに幼さを残しながらも、グラマラスな美体同性から見ても魅力的な身体で、大人の女性と遜色のない色香を放っていた。

そんな彼女、ドロシーは俺の顔を見つめると、妖艶な笑みを浮かべて舌なめずりをする。

そしてゆっくりと顔を近づけてきて……俺はその唇を受け止めた。

キスをした瞬間、甘い味が口の中に広がっていく。

それはまるで媚薬のように脳髓を蕩けさせていき、全身から力が抜けていった。

抵抗する事すら出来ずにされるがままになっていると、ドロシーは俺を押し倒して覆い被さってくる。

そのまま彼女は服を脱ぎ捨てて全裸になると、豊満な胸やお尻を惜し気もなく晒していった。

そして彼女は自分の秘所に手を伸ばしていくと、指先で弄っていた。

やがて愛液が溢れてくると、それを潤滑油にして膣内へと挿入した。

指を動かす度にくちゆくちゆという水音が響き渡り、それに合わせて彼女の口から熱い吐息が漏れる。

その姿はとても淫靡で、見ているだけで興奮が高まってきた。

そうしているうちに絶頂を迎えたのか、ビクビクつと震えながら達

する。

荒い呼吸を繰り返している彼女を抱きしめて、落ち着くまで頭を撫でた。

しばらくして落ち着いた頃合いを見て、今度はこちらから責め立てていく。

乳房に手を伸ばすと、柔らかさと弾力を兼ね備えた感触が伝わってきた。

「んっ……」

乳首を摘まむと、彼女はピクツと反応を示す。

そのまま指先に力を入れて押し潰すと、更に強い刺激に襲われたように、甘い声を上げた。

その反応を楽しむように執拗に攻め続けていくと、ドロシーは切なげな表情を見せるようになる。

そして限界が訪れたのか、彼女は腰を上げて擦り付け始めた。

スカート越しても分かるほど濡れていて、既に準備が出来上がっている事が窺える。

だがまだ本番に入るには早いだろうと思い、敢えて焦らす事にした。

太股を撫でるように手を這わせていき、下着の中へと侵入させる。するとそこはもう洪水状態で、今にも滴り落ちてきそうなほどだった。

しかしあえてそこには触れずに、割れ目に沿ってなぞっていき、時折クリトリスを刺激する程度に留めておく。

しばらく続けていると、とうとう我慢出来なくなったらしく、自分から押し付けてきた。

「うふふ……主ったら、こんなに大きくしちやって……♪」

彼女はそう言うときズボンの上からもっこりと盛り上がった部分に触れ、形を確かめるかのように優しく揉んでくる。

「ねえ……いいでしょうっ？」

「はあ、まったくお前は」

そう、俺は呆れながらも、彼女の要求に応えるべく服を脱いでいく。

すると彼女もそれに倣うようにして脱ぎ始め、お互いに生まれたまの姿となった。

俺達は抱き合うような体勢になると、互いの身体を重ね合わせる。彼女の肌はすべすべとしていて、まるで吸い付くようだった。

また胸の膨らみは手に収まり切れないほどで、とても柔らかく気持ちが良い。

さらにお尻の形も綺麗で、つついっ手が伸びてしまう程だ。

「あんっ、そんなにじっくり見ないで下さいよぉ〜」

恥ずかしさに耐えられなくなったのか、頬を赤らめながら抗議してくる。

だがその様子すら可愛くて、もっと虐めたくなくなってしまった。

だから俺は意地悪をする為に、胸の先端を口に含んだ。

「ひゃあっ!?!」

いきなりの事で驚いたようだが、構わず舌先で転がしたりして弄ぶ。

もちろんもう片方の手は秘所の方へと伸ばし、溢れ出た愛液を使って陰核を刺激した。

すると彼女はすぐに絶頂を迎えてしまい、ビクビクツツと痙攣する。

どうやら軽くイッてしまったらしい。

それでも俺は止めず、むしろ激しく責め立てていった。

「ああん! 駄目え……!」

彼女は快樂から逃れようと身を振るが、それを許さずしつかりと押さえ込む。

そして仕上げだと言わんばかりに指の動きを早めると、やがて再び達している。

俺はそんなドロシーに覆い被さり、今度はこちらからキスをした。

何度も何度も口づけを交わしながら、彼女の服を脱がしていく。

その度にドロシーは甘い声を上げていたが、恥ずかしいのか顔を背けていた。

しかし俺は構わずブラジャーも外し、露わになった乳房に手を伸ばす。

柔らかな感触を楽しむように揉みほぐすと、乳首が固く勃起していった。

それを口に含むと舌で転がすようにして舐め回し、もう片方の手では秘所に触れていく。

既にそこは下着越しでも分かる程湿っており、愛液が染み出していた。

「んっ」

そのまま、俺はドロシーの膣内に肉棒を挿入した。

膣肉が絡みついてきて気持ちが良い。

腰を動かす度、互いの肌が激しくぶつかり合う音が響く。

結合部から溢れた愛液が太股へと伝っていき、ベッドシートにも大きなシミを作っていた。

ドロシーの方からも俺を求めてくるようになり、彼女は自ら腰を動かし始める。

「キスして」

潤んだ瞳で見つめられると我慢できなくなり、唇を重ね合わせた。

同時にピストン運動を行い、絶頂へと向かう。

そして限界を迎えると同時に、俺は精を解き放った。

「あっ——！」

ドロシーもまた達したようで、ビクビクツツと身体を大きく震わせる。

暫くは互いに荒い呼吸を繰り返しながら余韻に浸っていたが、やがてどちらからともなく再び口付けを交わしていた。

それからセックスを続けていき、気が付くと夜になっていた。

何度も体位を変えながら交わり続け、その度に彼女の膣内へと射精する。

そうしているうちに段々と慣れてきたのか、お互いに余裕を持って行為を行えるようになっていった。とはいえそれは最初だけで、次第にまたお互いが夢中になって腰を振り合うようになっていたのだが……。

そんな風にして朝まで抱き合い続けた後、俺たちはようやく眠りに

つ
い
た
の
だ
っ
た
。

嵐の精霊（挿絵あり）

俺が暴れる事での影響なのか、それともその性質故なのか。

日本だけではなく、世界中から様々な奴が集まる。

それは、目の前にいる奴も例外ではない。

「主、どうだこの格好は！」

そう、引き戸を勢い良く入って来た橙色の髪の女も例外ではない。

「八舞、少しは落ち着けよ」

そう言いながら、俺は着物を身に纏っている八舞に文句を言いながら言う。

「ふふっ、何を言う。私の格好は完璧ではないか！ さあ、もつと褒めるがよいぞ!!」

そう言つて、胸を張るように見せる八舞。

「いや、別に似合つてるとかそういう感想を求めている訳じゃないんだけどな……」

そんな俺の言葉を聞いていないのか、聞いていても気にしていないのか。

八舞は楽しそうな笑みを浮かべて言葉を続ける。

風待八舞はいわゆる精霊だ。

それも、精霊の中でも強力な嵐の精霊だ。

戦闘能力でも、おそらくはかなり高く、こいつと戦った際にはかなり命懸けだ。

そして、現在は、俺を主と慕ってくれるようだが、芝居がかった口調で偉そうな態度を取る事が多い。

まあ、実際、力だけなら本当に強いのだが、そんな事を考えながらも、八舞の方へと視線を向ける。

その瞬間、着物から僅かな乳首をこちらに見せつける。

「どうだあ、我が着ている服は!! 素晴らしいであろう!?!」

八舞は興奮しているかのようには、鼻息荒くしながら言ってくる。

「いや、だからそういう感想はいらなくて……」

正直、こいつが興奮する理由が全く分からない。

「何を言っているのだ? 主はこの服を着た我を見て何も思わないというのか?」

八舞は不思議そうに首を傾げる。

「いや、普通に興奮するけど」

「やはり、そう思うだろお」

嬉しそうに笑う八舞。

しかし、すぐに真剣な表情になると言葉を続けてきた。

「主よ、何故この着物が興奮するか分かるか?」

俺は少し考えるような素振りを見せる。

「うーん………やっぱり、普段とは違う雰囲気があるからじゃないか?」

俺は答えを出すと、八舞はすぐに答える。

「確かにそれもあるだろうが」

「まあ、お前自身も魅力的だろう」

「主い!」

感極まったのか、八舞は抱きついてくる。

その際、僅かに乳首が見えてしまい、それを思わず見てしまう。すると、八舞はその事に気がついたのか。

わざとらしく自分の身体を見せびらかすようにして言う。

そんな様子を眺めていた俺に対して、八舞は言う。

「ふふっ、ここまでしたら、もうやる事は決まっているだろ」

そう、八舞はそのまま座る。

同時に、足をゆっくりと広げていき、股間を見せつけてくる。

そのまま、下着が見えるギリギリまで広げる。

「主のを求めて、ここが疼いて仕方がないんだあ」

艶めかしいうつとりとした声音で言う。

そんな姿を見続けている内に、自然と手が伸びる。

その手は八舞の太腿に触れる。

柔らかい肉付きでありながら、程よい弾力が返ってきた。

「あつ……♡」

八舞の声を聞きながら、指先に力を入れていく。

そして、その柔らかさを堪能しつつ、撫で回すように触っていく。

「んっ……ああっ♡」

甘い吐息が漏れ始めると同時に、指先に湿り気が帯びてきた。

更に、布越しにも関わらず、割れ目の位置すら分かり始めた。

そこを中心に円を描く様にして擦ると、より濡れている事が分かった。

「もうこんなになつてるのか？」

そう言いつつ、今度は人差し指を押し込む。

すると、中へと入り込んでいく感覚があった。

「くっ……あつ……」

痛みを感じたのか、顔を歪ませる八舞。

しかし、それは一瞬の事であり、すぐに快樂に染まった表情を浮かべた。

それと同時に、指先が締め付けられる。

その動きに合わせるように、指を動かしていく。

「はあ……はあ……主い♡」

熱を帯びた声で俺の名前を呼ぶ。

そんな彼女の顔を見ながら、指の動きを強くする。

それに伴い、水音が響き始め、それが次第に大きくなっていく。

そして、一際大きな音を響かせた後、彼女は果てた。

「どうだった？ 主」

「最高に気持ち良かったよ」

「なら、次は主の番だな」

その言葉に従うように、俺もまた自身の肉棒を彼女の膣内へ挿入していく。

「ああっ！ んっ……ふう……相変わらず大きいな、主のものは」
「お前が言うか？」

「くっつ、我だから言えるのだぞ」
そう言っつて笑う八舞。

俺の肉棒が、八舞の膣内へと入ると、彼女の体がびくんつと震える。
そのまま俺はゆっくりと腰を動かし始める。

「うっ……あああっ！」
「動くぞ」

宣言してから、腰をゆっくりと動く。

腰を動かす度に、その膣肉は、まるで嵐のように激しく絡みついてくる。

その快感に思わず声が出てしまう。

しかし八舞の方も余裕はないのか、体を震わせながら、こちらを見つめてくる。

快楽に耐えているのか、歯を食いしばっているように見える。
だがそれはこっちも同じだ。

八舞の体はどこに触れても柔らかくて気持ちいい。

胸などは特に柔らかいのだが、この柔らかさは胸だけのものではないような気がした。

俺はさらに腰を動かして八舞の中を攻め立てる。

すると八舞は一瞬目を細め——直後、大きく目を見開いた。
どうやら達してしまったらしい。

「ああ、子宮口のっ中につ、主のがっ入り込んでっ……！ はううっ
！」

ビクビクツと体を震わせながら絶頂の声を上げる八舞。

そんな彼女の姿に興奮しながら、俺も射精の準備に入る。

「くっ……出るぞ、八舞」

そう告げると、八舞はこちらを見て妖艶な笑みを浮かべた。

「ああ、来い、主よ。我が胎内で存分に果てるがいい……んあっ！」
その瞬間だった。

俺は腰を大きく突き上げ、一気に最奥まで肉棒を突き入れたのだ。

突然訪れた強烈な刺激に八舞は大きく目を見開き——しかしすぐに蕩けた表情に戻る。

そしてそのまま快樂に身をゆだねるように甘い声を上げた。

「ふわああっ、ひゃうっ、あ、あるじい……もつとお、もつと激しくう……！」

その言葉に従い、さらにピストン運動を続ける。

八舞の膣内は熱く潤っていて、とても心地よかった。

俺の動きに合わせて、八舞も身体を動かして快感を高めていく。

その度に彼女の大きな胸がぶるんぶるん揺れて視覚的にも興奮させてくれた。

「はあっ、あ、主……気持ちいいか？ 我の中は、気持ちいいか？」

俺は八舞の言葉に答えるように腰を動かす速度を上げていった。

八舞はその動きに合わせてるように自らも腰を振り始める。

やがて絶頂へと至ったのか、八舞の膣内が激しく痙攣し、精液を求めてきた。

俺はそれに答えようと射精に向けてラストスパートをかける。

「はあっ！ あああっ！ イクッ！ イってしまおうっ！」

そして、限界を迎えた俺の肉棒から大量の白濁液が吐き出された。

それと同時に八舞も果てたようで、身体を大きく仰け反らせる。

「ふああああああ——！！」

「く……」

ドクンドクンと脈打ちながら、八舞の中に精を放つ。

その感覚に身を震わせていると、不意に目の前の少女が口を開いた。

「……どうだ、主、我とのまぐわいは気持ちよかったか」

そう言っつて挑発的な笑みを浮かべてくる八舞。

しかしそれはいつものような不敵なものではなく……どこか不安げなもののように思えた。

まるで何かを恐れるように、それでいてすがりつくように俺を求めてきたのだ。

だから俺はそんな八舞に優しくキスをしてやる。

すると彼女は一瞬驚いたような表情を見せた後で、「ふっ……」と小さく笑ってからゆつくりと唇を重ねてきた。

「ん……ちゆる……れろお……ふぁっ！」

舌を差し入れて絡め合わせ、唾液を交換し合う濃厚なキスを交わす。

その間にも腰の動きを止めないで、何度も何度も彼女の子宮口を突いていく。

その度に八舞はビクビクと身体を震わせながら声を上げ続けた。

「あッ！ あっ、ああ!! いいっ……いいぞ、主よ……。もつとだ、もつと我を求めてくれ」

「くう……う、おおお!!」

俺は八舞の言葉に応えるようにさらに激しく突き上げる。

「あっ！ はあんっ！ そ、そうだ……そうやって、我に愛を注いでくれえー！」

俺がピストン運動を繰り返すたびに八舞の胸が激しく揺れ動く。

そんな光景を見ながら、俺は八舞の太股に手をかけて持ち上げた。

そして、そのまま一気に奥まで貫いた。

「ひゃうん!? ああん！ いい……イイツ！ 気持ちいいぞお!! もつと、もつとだ！ 我が愛しの主様よ！」

八舞はビクビクと身体を震わせながら、快樂の声を上げてきた。

その言葉に答えるかのように俺は何度も腰を打ち付けていく。

パンツという音が部屋に響き渡り、その度に八舞の口から喘ぎ声が上がった。

そして——「あああんっ！ イクウウウツ!!」

八舞が絶頂を迎えると同時に俺も射精してしまった。

びゅるとと精液を吐き出すと、八舞の秘部からどろりと白い液体が流れ出ていた。

どうやら八舞も同時に果てたようだ。

荒く息を吐きながら、俺はゆつくりと肉棒を引き抜いた。

八舞はその刺激にも感じているのか、「あん……」と甘い声を上げていた。

「はあ、はあ……。うむ、なかなか良かったぞ主よ。やはり主の責めは最高だな！」

「そりゃどーも」

俺は苦笑しながら汗ばんだ前髪をかき上げた。

依存の巫女

その日、グレイフィアからの紹介で、とある人物と会っていた。どうやら、彼女はグレイフィアの義妹の眷属らしい。

名は姫島朱乃。

その名には多少、聞き覚えがあった。

「まさか、姫島の嬢ちゃんか、俺の所に来るとはね。

それで、なんで俺の元に？」

「グレイフィア様からの紹介です。」

あなたに聞けば、悩みが晴れると

「悩みねえ、悪いが、俺にはそんな大した事はできない。

けどまあ、鬼である俺の前に現れた以上は、何をされるかは分かっているよな」

そう、挑発染みた言葉で言う。

「ええ、それはその」

そう言いながら、頬を赤くしている。

「ふうん、なるほどね」

「何か」

「いや、なに」

そう呟きながら、俺は姫島に近くを寄る。

歳としては、明石と同世代ぐらいだろう。

体格もグレイフィアと同じぐらいに良いだろう。

しかし。

「良いぜ、今晚、どうだ」

「あっはい」

その、俺の言葉にあっさりとした傾いた。

姫島の子供に本家から離れた奴がいると聞いた事がある。

それが、目の前にいる奴だと分かる。

そして、子供の頃から多くの悲劇が彼女に襲っただろう。

だからこそ、こうした軽く触れ合うだけで、彼女はこちらに依存する。

いとも容易く。

姫島は、眼前にある俺の肉棒に対して白い手を触れる。少々手間取る行動と、その拙さは心地良かった。

「行為は未だにやったことないのか」

「ええ、ほとんど男性経験など」

そう、眩きながら、ゆっくりと俺の肉棒を振れていく。

「これを、こうすれば」

「飲み込みは良い方だな、そのままだ」

「はっはい」

俺の言葉を聞きながら、勃起した肉棒を観察するようにつめる。

「それじゃ、そのままやる事は分かっているな」

「はい」

そう、姫島の手コキで、多少は勃起している肉棒に姫島は顔を近づけ、舌を伸ばす。

恐る恐ると、肉棒にしたを密着させ、ゆっくりと舐める。

「んっ、ふっ、んんっ」

元々、几帳面な所があるのか、肉棒の根元から唾液を丁寧に舐めていく。

遅く、ゆっくりと塗られていく肉棒。

その少しずつが、俺にとっては快感となって、震える。

舌先が亀頭に触れば、びくんつと跳ねてしまう。

しかし、それでも懸命に舐めてく姿には興奮させられる。

次第に、口を大きく開けて、亀頭を包み込むように口に含む。

まだ、半分も入り切ってはいないだろう。

そんな大きさにも関わらず、一生懸命と口に含んでいく。

その姿だけで、射精しそうになる。

だが、完全に射精する事はないだろう。精々、先走り汁が出る程度だ。

その事に姫島も気づいたのか、それとも負けず嫌いなのか。

より一層、口をすぼませながら、必死になってフェラを続ける。

やがて、肉棒が完全に口の中に納まった。

そこで、姫島の喉元まで入っている事を確認した。

苦しげに、呼吸をする度に上下する胸を見ながら、俺は言った。

「苦しいなら、無理して奥に入れる必要はないぞ？」

「いいえっ、まだっんっちゅ」

言いながらも、更に深く飲み込もうとしてくる。

それが健気にも思えて、少しばかり意地悪をしたくなる。

腰を動かせば、自然と肉棒は動く。

そしてそれは、喉の奥を刺激する事になる。

突然の動きについていけなかったのか、喉奥を強く刺激されたせい

か、姫島は嘔吐く。

反射的に離れようとするが、それを逃さない様に後頭部を抑えつける。

それにより、更に強く肉棒が喉奥へと突き刺さり、嘔吐いたままの状態で止まってしまう。

苦悶に満ちた表情のまま、目尻からは涙が流れ出す。

しかし、それで許すはずもなく、無慈悲に肉棒を突き立てる。

苦しげな声を上げつつも、歯を立てないように懸命に耐える。

何度も何度も突いている内に、徐々に抵抗力が無くなっていく。

まるで玩具の様に扱われている状態だが、それに反抗するような様子はない。

ただただ、耐え忍ぶのみ。

しかし、限界が来たのか、男の肉棒を吐き出してしまう。

荒い息遣いをしながら、男は問うた。

「もう終わりにするかい？」

「ま……だですわ……」

そう言うと、再度挑戦するように、男の前に座り込んだ。

両手で竿を掴み、再び口に含んだ。

今度は最初から勢いよくとは行かず、ゆっくりと味わうように飲み込んでいった。

先端から根元近くまで飲み込むのには苦労しているようだったが、それでも何とか全てを飲み込めたようだ。

そのまま、頭を動かすようにして出し入れを始める。
最初はゆっくりだった動きも次第に早くなり、最後には高速ピストンになっていた。

頭を激しく動かしながら、舌を使って裏筋を刺激してくる。

「上手いな……。とても初めてとは思えないな」

そう、俺が頭を撫でる。

すると、姫島はまるで緊張が解けたかの様に笑顔を見せた。

その瞬間を見計らって、俺は一気に口の中に射精した。

「んぶっ!?!?」

突然の事に驚いた姫島だったが、すぐに口を離そうとしない。

それどころか、出された精液を全て飲み干し始めたのだ。

喉を鳴らして飲む姿は、淫靡以外の何物でもない。

やがて全ての精液を飲み干すと、ようやく口から離し、顔を上げた。

「ご馳走様でした……」

妖艶な雰囲気纏いながら微笑むその姿は、普段の彼女を知る者ならば驚くだろう。

それだけ今の彼女は魅力的であり、また、普段とのギャップを感じさせる。

「ああ、美味しかったかい?」

「はい……」

「じゃあ、次はこっちだよ」

そうやって、俺は彼女の女性器に指を入れた。

そこはもう濡れていて、愛撫するまでもなく準備が整っていた。

「ひゃっ!」

「どうだい? 気持ちいいかな?」

「はい……とても……」

そうして愛撫を続けながら、今度は俺の方からキスをする。

そしてそのまま舌を入れていくと、姫島は応えるように絡めてきた。
た。

しばらくそうした後、一旦唇を離す。すると唾液が糸を引き、それが切れると同時に再び口づけた。

今度は舌だけでなく歯茎や頬の内側まで舐め回すようなディープなキスだ。

それを何度も繰り返した後、一度口を離れた。

そして、今度はお互いの顔を見つめ合う。

その表情からは先程までの緊張の色は消えており、代わりに蕩けたような色気が漂っている。

「では、そろそろいきますね」

「はい……お願いします」

そしていよいよ本番に入る時が来た。

俺はゆつくりと腰を進めていき、ついに彼女の中へと侵入していく。

「んっ！ ああ……」

挿入された瞬間、彼女は少し苦しそうな声を上げた。

しかしそれは一瞬のことで、すぐにまた甘い吐息に変わる。

やがて根元まで入ると、そこで動きを止めて様子を伺うことになった。

「大丈夫ですか？」

「はい……。でもなんだか変ですわ」

どうも痛みというより違和感の方が強いらしい。それでも少しずつ慣れてきたのか、段々と呼吸が落ち着いてきた。

すると、俺の方にも余裕が出てくる。

なのでゆつくりと腰を動かし始めた。

最初はぎこちなかったが徐々にスムーズな抽送ができるようになり、さらに速度を上げていく。

パンツ！ パアン！！ 肉同士がぶつかり合う音が響き渡る。

「あっああっ身体の奥からっ何か揺れてっ♡」

その度に彼女は身体を震わせ、甘い喘ぎ声を上げる。その振動に合わせるように彼女の豊かな乳房が激しく揺れていた。

俺は我慢できず、腰の動きに合わせて揺れている乳首を口に含んだ。

「ひゃあん!？」

突然敏感な部分を吸われ驚いた姫島は思わず身体に力を入れてしまふ。それがより強く締め付ける結果となる。

「あつああ……いいですわ……もつと奥まで突いて……」

切なげな声でそう言うと、彼女は自らの足で俺の背中を強くホールドした。逃さないように絡みついた太ももの感触は柔らかくそして心地よいものだった。

「ん……ちゅば……れろお……」

そのまま唇を重ねる。互いの舌を入れあい口内を犯しあう。その間も下半身を動かすことも忘れない。やがて限界が近づいてきたのか膣内の締まりが強くなった。

「ああー・ダメエー！」

同時に一際大きな声を上げて絶頂を迎えた。それにつられるように俺もまた欲望を放つたのだった。

性行為が終わりと共に、ゆっくりと倒れる。

おそらく、頭の中は白く染まっている。

それが分かる程に、今の彼女は乱れている。

勝ち気な巫女

「よう、旦那、遊びに来たぜー!」

そう、俺の屋敷に来たのは東雲初穂。

彼女は、この京都の神社で巫女を務めている。

妖怪と交流があり、幼い頃に遊んだ時に懐いている、

その時の縁もあり、現在は配下の一人という事になっている。

そして、その日はある意味勝負の日となっている。

「まったく、旦那はこう言うの、よく飽きないよな」

そう挑発染みた言葉を言いながら、亀頭全体に舌を這わせ、湧き出す先汁が舐めとられていく。

さらに、パイズリの動きが舐める動きと連動し、快感は際限なく高まっていく。

普段の勝ち気な初穂の予想外のご奉仕振りを凝視しながら、俺は歓喜していた。

勃起を挟み込んだ乳房は、唾液と先走りのミックスジュースでヌメヌメと濡れ光っている。

体液まみれになった爆乳の先端で、ピンクの乳首がツン、と尖り勃っているのが卑猥だ。

「俺ばかり気持ち良くしてもらうのは申し訳ないから、初穂にもお返ししてあげるよ」

「お、お返し!? はひあつ、ひゃああんっ!」

愛撫を待っているかのように突き出た乳首を、優しく摘まみ、クリクリと揉み転がしていく。

そう、乳首を揉みながら、そのままキスを行う為に顔に近づく。

唇を触れあわせただけで、ウツトリするような感触が、苦しみを解すかのように頭の芯を駆け抜けた。

「んぐううう!? んむううう〜ンツ!」

驚きに目を見開き、抵抗しようとする初穂の肢体を抱きしめ、唇をさらに強く押しつける。

「んむううう、んふんふんふ、ふ〜ッ! んぐふううう〜!」

興奮のあまり、苦しさすら忘れて俺は、変な鼻息を漏らしながら触れあつた唇をグリグリと押しつけて貪る。

「きゅふ……んん……い！　お、落ち着いてっ、んくむうう〜ンツ！」
くぐもつた悲鳴を漏らしながらも、初穂は引き結んだ唇を緩めようとはしない。

キスに気を取られている初穂の爆乳に掌を被せ、指をウニウニと蠢かせて揉み立てたる。

「す、すごいっ！　初穂の胸は相変わらず、柔らかいのに、張りがある！」

「ふやあ！　胸え、オツパイに指がつ、あっ、ひあっ……んぐむうう!」
いきなりの乳揉みに驚き、声を上げた口に舌を思いつきり挿入する。

温かく、ほのかに甘い唾液の味と高貴な香りに陶醉する。

「ンンンツ!?　ひや、けいひつ、口のなか、そんらにペロペロしひやっ、ふひあっ、んむ、あふううう……い！」

口の中を舐め上げる度に初穂は甘い声を上げる。

「はむ、んふ、くちゆくちゆくちゅ……ちゆるるっ！　ずちゆるるるっ！　ゴクツ、ゴクゴクンツ！」

口の中で舌を旋回させ、大量に湧き出た唾液を下品な音を立ててすすり込む。

「あはあむうう!?　そ、そんらに音立てないれ……い！　あふう、くううん！」

攻撃的なディープキスで唾液を吸い上げられた初穂は、切なげに眉を寄せ、色っぽい喘ぎを漏らす。

「たっく、旦那が急にキスするからな、こっちにも集中したいのによお」

亀頭全体に舌を這わせ、湧き出す先汁が舐めとられていく。

さらに、パイズリの動きが舐める動きと連動し、快感は際限なく高まっていく。

ウツトリと目を細めた初穂が、尖らせた舌先で尿道口を突く。

「くほっ！　おうっ、そ、そこヤバイって！　お、おっ、あうっ！」

勃起の芯を快感の稲妻が幾度も駆け抜け、抑えきれない快感の聲が漏れてしまう。初穂は俺の反応を見てクスッと笑い、再び舌を伸ばしてくる。

裏筋に沿ってチロチロと這い回り、雁首の裏まで 丹念に刺激してくる。

その動きに合わせて、両手で優しく肉茎を握りしめ、ゆっくりと上下に動かす。

「うあつ！ ちよ、それ、気持ち良すぎるってば！ 初穂、手加減してくれえええ！」

亀頭の割れ目に舌を押し込まれ、ビリビリとした電流が腰の奥に走る。

そのまま鈴口の中に侵入され、敏感な粘膜をチロチロと舐められると、背骨から脳天まで強烈な性感が突き抜ける。

「だ、ダメだって！ もう限界だからっ！ あつ、あああああつ!!」
「わぷっ！ ん、むぐ、むぐ、ごくっ、ごくん……」

耐え切れず放出した精液は、初穂の喉奥に飲み下されていく。射精の余韻に浸りながら、ぼんやりとその光景を見つめていると、

「うふふ、いっぱい出たね。
でもまだ足りないよな？」

初穂は再び唇を重ねてきた。
今度はこちらからも積極的に舌を絡める。

「むう、ちゅぱ、んむう、じゅるるるっ！」
お互い貪るように激しく求め合い、舌や唾液を交換し合う。

しばらくすると満足したのか、顔を離して息をつく。
俺は初穂を抱き寄せて耳元で囁いた。

「もつと、したいんだろ？ 初穂」
「ああ、旦那のを、もつと味わいたい。あたしのオツパイと、オマッコ

で、全部受け止めてやるぜっ！」
「いいとも、たっぷり味わってくれっ！」

俺は初穂の太股を抱え込み、思いつきり 自分の上へ引き寄せる。
亀頭が秘裂に触れ、ヌルリと滑る。

そして一気に膣内へと埋没していく。

初穂の胎内は熱く蕩けていて、それでいて、キュウキュウと絡みついてきて最高に気持ち良い。

だがそれ以上に、亀頭を包み込む極上の柔肉の感覚が堪らない。あまりの快感に思わず気を失いそうになる。

それでも、初穂の一番奥まで到達するまで、必死で意識を保つ。

子宮口に到達したところで一旦止まり、軽く息を整える。

「あああ、はああつ……！ あ、あはあ、入ってるう、旦那のがああ……！ ああ、ああああ……！」

絶頂に達してしまっただかのようにビクビクと痙攣する初穂。

愛おしくなって強く抱きしめる。

背中に回された初穂の腕にも力が込められる。

繋がったまま、お互いの肌の温もりを感じながら見つめ合う。

そうしているだけで幸せだった。しかし、その時間も長くは続かない。

「動くぞ、初穂！」

「来てっ、あたしの中でっ、気持ち良くなっつ！」

言葉と共に腰を突き上げる。

結合部からブチュツツという水音が響いた。

「くうんん！ あはっ、ああっ、あはあああん！」

一度動けば止まらなかった。

何度も腰を打ち付け、初穂の体を思う存分犯しまくる。

「ああ、あはあ！ 凄いつ！ こんな初めてえ！ はああん！ んああ！ ああああ！」

快感に身悶える初穂の乳首を指で摘まみ、クリクリと弄ぶ。

「ひゃうん！ 胸え、おっぱいいいじっちゃダメええ！ あっあっあっ、いひいつ！ あはあああ！！！」

俺のペニスで突かれる度に初穂の口から甘い声が漏れる。普段の勝気な表情が快楽に歪む様は、俺をさらに興奮させた。

初穂の両足が、こちらの下半身をガツチリとホールドし、ピストンする度にグイグイと押しつけてくる。それがたまらなく気持ち良

かった。

「うおおおっ！ 初穂の中、スゲエ締まるっ！ もう、もう出そう
だっ！」

「出してっ！ いっぱい！ あたしの中に！ 全部！ 中にちようだ
い！ あはああ！ イクうう！ イツちやうううううっ！」

「出るっ、もう、我慢できねえっ！」次の瞬間、猛烈な勢いで精液を噴
出した。

膣内のヒダを一枚一枚搔き分けるように擦り上げ、 射精しながら
さらに突き入れる。

その度に、初穂の体が小刻みに震えた。 初穂の一番奥に先端を押し
つけた状態で、最後の一滴まで搾り出す。

「ああああ……す、すごい、まだ出てるう……！」

精液を出し尽くした俺は、ゆっくりと初穂の中から 肉棒を引き抜
いた。すると、栓を失った秘裂から 白濁した液体が溢れ出し、俺の
股間を濡らす。

「んっ……はあっ……はあっ……」

初穂はぐったりとして息を整えている。

「初穂……」

「旦那あ……」

初穂はこちらに手を伸ばし、キスを求める。

「んっ……」

俺は優しく舌を差し入れ、初穂の舌先と絡ませる。

そのまま舌を絡め合い、唾液を交換し、口の周りがベトベトにな
るまで濃厚な接吻を交わす。「ふう、んっ……ふはあっ」

唇を離すと、名残惜しげな吐息がお互いの口から洩れる。

「旦那あ、もっとお……」

初穂は甘えた声で続きを求めてきた。

悪魔の黒猫

「にやあ」

そう言いながら、その日の屋敷に訪れたのは黒い猫。その猫は俺の膝の上に座る。

「それにしても、まさか白音の所と繋がるなんてにや」

そのまま、煙と共に黒い猫の姿は変わる。

この猫の名前は黒歌。

配下の1人であり、悪魔の勢力で何やら問題を起こしていたらしい。

昔の知り合いに似ていたという事で、捕ま、保護をした。

それと共に事情を聞き、彼女の願いを叶える事を条件に、配下になった。

そして、その関係もまた、他の配下と同じだった。

「にやあ」

腰を持ち上げられ、下腹部が丸見えになる恥ずかしい体勢。

顔を赤らめながら、凜が恥ずかしそうに睨んでくる。

「自分で足を抱えて。もっと良く見えるようにね」

「ふあっ!? くうっ、ううっ……はあ、んっ、んうっ、んううっ……はううんっ!」

羞恥の声を漏らしながらも、黒歌は言われるままに膝の裏を両手で抱え、グツと下腹部を突き出してくる。

「くひッ!? はひいん、は、恥ずかしい……ああ……うっ、はふうっ、ひインッ」

羞恥に震えながらも、肉芽は充血し肉筋は腫れぼったくなっている。

軽く肉ヒダを指の平でなぞると、ヌルリとした汁が指に絡みついている。

「くひッ!? はあ、はうっ、ふううっ、はあ、はあっ、んっ……んアア
ンッ!」

既に敏感になっているのか、ビクツと腰を跳ねさせ黒歌が嬌声を放

つ。

「はあっ、ああ、ひいんっ!? ああ、息がかかって……はうっ、くっ、にやあ」

「気持ち良いか?」

気持ち良くなってしまうている事を認めるのが恥ずかしいのか、黒歌がツツと視線を逸らす。

「んっ、ちゅっ、ちゅっ、れろオオオッ!」

ピンク色の媚肉に、舌腹を押しつけながら舐め上げる。

「くひインツ!!? はうっ、ふひっ!? いいっ、ヒインツ、はあっ、あひインツ!」

ザラリとした舌の感触を花裂で感じた瞬間、肉壺が蜜汁をトプトプと溢れ出させる。

耳に心地よい悦びの声を聞きながら、肉ヒダへと唾液をまぶしていく。

それと共に、尻から動く黒い猫の尻尾が揺れ動く。

「ふっ、ふうっ、はふっ、んくウウツ、ひインツ! イイツ! はふうっ、あふウウンツ!」

ゆっくりとした舌の動きを、お腹をくねらせながら受け入れる黒歌。

トロリトロリと源泉から湧き上がってくる蜜汁を舌で掬い取ると、ゴクリと喉を鳴らして飲み下す。

「ああ……うあ……あああ……あああああ……」

俺が蜜汁を飲んだのを見た黒歌が、悦びにブルツと身を震わせる。「んっ、ずずっ、ジュるるるるる!」

「ひやうツ!! くひインツ! ああ、お、音っ……たてたらあ……!?! ああっ!?!」

黒歌に聞かせるように、ジュルジュルと音を立てながら溢れ出る蜜汁を啜り飲む。

その恥ずかしい音に全身を紅潮させていく黒歌だったけど、羞恥よりも喜悅の方が大きくなってきているのか――

「んあっ、はあっ、はあウウンツ、くうっ、ひっ、インツ、ふうっ、ふあっ

!? はひイインツ！」

熱い息を漏らしながら、グツ、グツと下腹部を突き上げ、肉弁を俺の顔へと無意識のうちに押しつけてくる。

眼前にあるピンク色の肉裂を丹念に舐めながら、舌先で充血した肉芽の皮を剥いていく。

「くひゅウツ!? へあつ、はひイイツ！ ふうつ、うつ、んふうつ！

あはあああんっ！」

ツンツンと肉芽を突くと、ビクビクツと体を震わせながら反応する。

喜悦と羞恥を混ぜ合わせ、少しずつ頂へと昂っていく黒歌。

自己主張するように勃起した肉芽を、軽く唇でついばみ、歯を立てる。

一際大きな声を上げると同時に、突き上げた下腹部をブルブルと痙攣させる。

軽くイッてしまったのか、半開きの唇からはタラタラと涎が垂れ流れていた。

「イッちやっつたみたいだねっ」

「くうつ、んっ、んひインツ……ふう、ひうう、そ、それは……っ！

はっ、はふウウツ」

言葉責めにも敏感に反応してしまうほど、感じやすくなっているらしい。

秘処から溢れる蜜汁の量も心なしが増えていようだし、何より――

――俺は、黒歌の下腹部に手を当てた。

そして、臍のすぐ下の辺りをぐつと押し込むように力を込める。

すると――グチュリ……。

濡れた粘膜同士が擦れ合う音が聞こえてきた。

「あつ……ああっ!? や、やっぱりい！ 私のお……こ、こんなになつてるう……!?!」

肉色の花卉が大きく口を開き、その中から透明な粘液をしたたり落としていたのだ。

俺の手には湿った感触があつたけど、黒歌はその手を見て真っ赤に

なってしまう。

自分の股間を見下ろして、指先に絡んだ愛液を確認すると……もう我慢できないというように激しく身悶えし始めた。

「わ、私つたら……ど、どうしてえ……！」

潤いを増した瞳で上目遣いに見られ、ごくりと喉が鳴る。

今までの彼女ならまだしも、今の黒歌は色気が増し過ぎていて理性がヤバかった。

「おねがい、します……っ。お願いですからあ……してにやあ？」

「何をだ？」

普段の様子とは違う黒歌に対して、俺はわざと意地悪く尋ねる。

すると彼女は顔を耳まで赤くしながらこう答えてきた。

そう、女性器を見せつけるように、両手で広げる。そして媚びるような声で俺に言うのだ。

「私の……を……あなたのおち○ぽで可愛がってほしいんですう♡♡」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かがブチッと切れたような気がした。

今まで耐えていたものが一気にあふれ出るかのような感覚とともに、俺は黒歌を押し倒す。

黒歌も抵抗しようとせずそのまま倒れ込み、互いの唇を重ね合わせる。

舌と舌を合わせながら、服を脱いでいく。

お互いの性器を刺激しあい、高まらせていく。

そして互いに準備ができたところで挿入する。

肉棒を包み込む黒歌の膣肉が俺を離さないかのように強く締め付けてくる。

子宮口まで届くのではないかというほどの激しいピストン運動を行う。

「んっ!! あっ! 激し……あんっ!」

「本当に、こういう時は積極的だな」

こちらが腰を動かす度に、さらにこちらを刺激するように激しく動

く爆乳。

そしてそれを掴んで揉みしだいて形を変えさせる。
さらに首筋に噛みつき、キスマークを付ける。

「ああ……はあ……くうん!!」

先ほどよりも強い痙攣を見せて絶頂を迎える黒歌。

その絶頂に合わせてこちらも射精をする。

びゅるると勢いよく出た精液は全て膣内に収まったようだ。

ゆっくりと引き抜くと、中からどろりと白濁した精液が出てきた。

「これで終わりかしら？ もっとしたいのだけれど……」

息遣いも荒いまま黒歌が言う。

それに俺は答える。

「満足するまで付き合うさ」

鬼の執事

俺の配下の多くは妖怪は勿論だが、それ以外の関係者も実は多くいる。

それは、俺が未だに鬼としての戦闘にしか頭になかった頃に、俺を退治しようと行動していた多くの陰陽師や海外からの強者達が来る事が関係していた。

そのような奴らと対峙し、戦いを行う中で、中には奇妙な縁で交友し、そのまま配下となつている人物も以外と多い。

「主、そろそろ朝食の時間です」

そう、現在、俺の世話をしている執事のような黒いスーツを身に纏っている女性もまたその一人である志木麗佳。

腰まで伸びている紫色のポニーテールに、左目の眼帯、スーツの下からでも分かる程の巨乳の持ち主だ。

この家の資産管理から食事の世話までしている事もある。

「ああ、別にそこまで世話をしなくても」

「主」

「ああ、分かったよ」

元々、厳格な性格をしている志木は有無言わさないように威圧のあたる表情でこちらを見てくる。

そんな彼女の様子に俺はため息混じりに答えた。

そうして、俺はそのまま志木が作った朝食を口へ運んでいく。

志木が作っている食事という事もあり、それはかなり美味しい。

そして、そのまま食べ終わると共に、俺を見つめる志木へ目を向ける。

「どうしたんだ？」

「主は、今日は一日暇だと聞きます」

「俺は基本的に暇だぞ、それを聞いて、ああ」

その言葉と共に、俺は納得すると共に笑みを浮かべる。

「だから、イライラしていたのか」

「意地悪を言わないでください」

そう言つて、恥ずかしそうな反応をする彼女を見て、俺は苦笑いをした。

俺はそんな、言葉に出さない志木に対してそのまま近づく。

そのスーツの下に隠れている巨乳に向けて、俺は手を伸ばした。

志木の体はビクツと震えると、視線が少し泳ぐ。

しかし、抵抗する事もなく彼女は黙つて受け入れるような様子を見せた。

その体勢のまま、俺は志木の顔へと手を伸ばす。

頬に触れた途端、再び志木は体を震わせた。

その瞳の奥には期待感が込められており、どこか妖艶な印象すら感じさせる。

ゆつくりと撫でるようにしながら指先を動かすと、小さな声を上げて志木は目を細めた。

その瞬間、俺は志木を引き寄せると同時に自らの唇を重ねる。

最初は驚いた様子を見せた志木だったが、すぐに受け入れて自ら舌を出して来た。

舌同士を絡めながら互いの唾液を交換しあい、次第に興奮していくのを感じた頃合いで顔を離す。

すると、そこには名残惜しげにしている表情を見せる志木がいた。

「まだ、足りないか？」

「……はっ」

小さく呟くように言った志木の言葉を聞いて、俺は再び唇を重ねた。

今度は最初から激しく互いに貪り合う様にキスを行いながら服を脱いでいき全裸となる。

スーツの上からでは分からなかった程に大きく勃起している乳首。それを指先で摘まむなり、志木は大きく喘いだ。

普段とは違う激しい反応に驚きながらも、俺は志木の胸元に手を伸ばしていく。

大きな乳房を下から持ち上げるように掴んでいくと、手の平全体に伝わる柔らかさを感じる。

同時に硬くなっている突起部分を軽く擦っていくと、さらに声を上げる志木。

感覚が良いとは思っていたもののここまでの反応を示すと思っていなかったため、驚いてしまう。

だが、それで止める事はしない。むしろ、もっと良くしてやろうと思えたのだ。

優しく触れるだけだった愛撫を変えて行くと、志木は更に甘い声を上げ始めた。

「ああっ……んっ……ふううん！ はあああ！」

「いつもよりも敏感になっていくようだが、どうしてなんだ？」

「わかりません……でも、すごく気持ちよくて……」

「そうなのか？ じゃあ、これはどうだ？」

胸への刺激を止めないまま、もう片方の手で下腹部へ触れて行く。

茂みの中は既に濡れており、少し触っただけで水音が聞こえた。

「ひゃうっ!? み、見ないで下さいい〜」

「ダメだな。ちゃんと見ないと分からないだろう？」

恥ずかしさに赤くなった顔を見せまいとしているのか、両腕を使って隠そうとする志木。

しかし、俺がその腕を掴む事で阻止する。そして、強引に足を広げさせた状態で割れ目へと手を伸ばす。

そこはぐしよぐしよになっており、ヌルリとした液が大量に溢れ出していた。

指先を当ててみると、抵抗する事なくスルツと中に入ってしまう。中に入れても動かしていないというのに膣内はヒクつき、さらに愛液が溢れ出している。

「すごいな……。こんなになってるぞ？ 志木のここは」

わざと大きな音を立てるようにしながら手を前後に動かす。すると、それに反応して彼女の腰がビクビクつと震えた。

「あっ……！ だめえ……そんな事されたら私……！」

「我慢しないでいいんだぞ？ ほら、一回イってみろよ……」

そう言うと同時に、俺はより一層激しく手を動かし始めた。

「ああっ!? ?……んっ!! ?……あ、あああ~~~~っ!!!」

背中を弓なりに仰け反らせながら絶頂を迎える志木。秘部からは透明な液体が勢いよく吹き出し、地面に水溜りを作った。

ピクピクと痙攣する志木を抱きかかえるように支えようと、そのままゆっくりと地面へ寝かせる。その顔には涙の跡があり、乱れた呼吸で胸が大きく上下していた。

だが、そんな彼女に対して、俺は休ませる暇を与えず、そのまま彼女の女性器に肉棒をゆっくりと挿入した。

そして一気に奥まで貫く。

突然の事に驚いたのか、志木の膣内がきゅつと締まるのを感じた。先ほど指を入れた時よりも狭く感じる。しかしそれでも俺自身を包み込む柔らかさだけは失われておらず、温かく迎え入れてくれる。

ふうー……つと大きく息を吐き、それからまた腰を振り始める。

今度は最初からペースを上げていく。パンツ！ という肌を打つ音がどんどん早くなっていく。

志木は最初は苦しい声を出していたが、すぐにそれすらも快楽として受け止め始めたらしく、喘ぎ声を漏らし始めた。

「あっ♡ やあっ……んっ♡」

やがて絶頂が訪れたのか、背中を大きく仰け反らせながらビクビクと身体を震わせる。

それと同時にきゅううううつとキツいくらいに強く締め付けてきたため、射精しそうになるのを必死に耐える。まだだ……もつと楽しまなければ……。

そう思いながらも俺の限界が近い事を悟ったのか、志木は再びこちらへと向き直り、脚で俺を抱き寄せてくる。そしてそのまま唇を重ねてきた。

俺はそれを優しく受け入れつつ、舌を差し入れて口の中を犯していく。彼女の口から漏れる甘い吐息と、絡み合う唾液の音だけが響く中、再び抽送を再開する。

「いいよ……来て……いいっばい出してください……!」

その言葉に限界を迎えた俺は、子宮の奥深くまで届くように勢いよ

く精を放った。

「あぁっ……！ 熱い……出てます……」

その熱を感じ取った志木もまた達したようだ。しかしそれでも腰の動きを止めずに、より一層激しく打ち付けた後、最後の一滴までも搾り出すかのようにゆっくりと引き抜いていく。

「んう……」

ずるりと抜けた陰茎には大量の愛液と混じって白く濁った精液が大量に纏わり付いていた。それはまるで子種を求める女のように。

疲れ果てて、普段の志木からは考えられないほど扇情的な様子だった。

「本当、何時ものお前からは考えられないな」

破天使

この世界において、変わり者は意外と多くいる。

それは、俺がこれまで長い鬼生を生きていたので、理解している。強大な力を持つて、不幸になった奴もよく知っている。

そのつもりだった。

「なあ主」

「どうしたんだ」

「うどん、食いたい」

それは目の前にいる俺の配下と一応はなっているはずの茅森月歌の思考回路に関しては、よく分からなかった。

「うどんは、別に良いけど、何を食いたいんだ」

「刀削麺、今、ここで」

「なぜ、そこで刀削麺！」

うどんを食べたいという言葉までは理解できたが、まさか、この場で行いたいと言うとは、さすがに予想外だった。

「何を言っている、主だって、うどん好きだろ！」

「だったら、茹で立てが一番に決まっているだろ！」

「茹で立てだったら、普通に食いたいわ。というよりも、そんな事してみろ、あいつが怒り狂って、また殺されかけるぞ」

「なるほど、それは面倒だ。所で、主」

「今度はなんだ」

「刀削麺しようぜ！」

「まさかのループか」

先程の会話が終わったはずなのに、なぜ同じ話題が出ていたのか、俺は思わず声を出してしまう。

「そもそも、なんで、食いたいと思ったんだ」

「いや、さつき適当に散歩していたら、なんか変な刀を拾ってな」

その言葉と共に茅森が取り出したのは、刀だった。

そこから感じるのは、何か奇妙な感覚があり、何か覚えがあったが。

「あっ妖刀だ、それ」

「マジか！ だから、さつきからうどんを斬りたくて仕方なかったのかっ」

「多分だが、それは人を斬りたい衝動だと思うぞ。

むしろ、それでうどんを食いたいというのも可笑しいだろ」

そう、呆れながら、俺はそのまま刀身をそのまま砕ける。

「あつ、壊れたか」

「壊れたじゃないよ、たく。

天使のハーフだからって、可笑しいだろう」

「そうか？」

目の前にいる頭の可笑しい女はただの頭が可笑しい奴じゃない。

彼女は元々は天使のハーフであったが、様々な理由では今はこの京都で過ごしている。

そんな彼女だが、普通ならば、墮天使化しても可笑しくない。

しかし、それは起きなかった。

本来ならば、欲望に満ちた行動をすれば、墮天使になる。

なのだが。

「それにしても、主」

「なんだ、刀削麺はやらないぞ」

「流しそうめんを食いたい」

「今度はそつちかあ」

彼女は墮天使にならない。

というよりも、おそらくはならないだろう。

彼女にとって、欲望とは本能のような物。

それが、左右されたのか、本能に従った行動は墮天使にならないようだ。

それはおそらくは、天使が神を崇拝するのが本能であるからだと思う。

「まあ、どちらにしても、欲望のない生き物なんて、いないはずなんだけどな」

欲望の塊のような俺が言うのもあれだけだな。

「むう、主はなかなか」

先程まで、騒がしかつた茅森はそのまま一変。

そのまま俺の方へと寄り添うと共に、真つ直ぐと俺の目を見つめる。

「仕方ない、それじゃ主の白いのを頂くとしますか」

その言葉を言いながら、俺をがっしりと、その身体を固定させる。

片目は隠れており、赤い瞳がこちらを見つめる。

それと共に、俺はそのまま畳の上に寝転がされる。

そのまま俺を馬乗りにさせ、ゆつくりとした手つきで俺の上着を脱がそうとする。

俺は抵抗する気もなく、それを見ていた。

脱がされた上着は部屋の隅に放り投げられ、ベルトも外されズボンも下ろされてしまう。

そして上半身裸になった俺に対し、茅森はゆつくり近づく。

そして顔を近づけると、舌なめずりをする。

「じゃあ、いただきます」

そう言うと同時に、唇を重ねてくる。

キスをしている間、彼女の舌の感覚を覚えていた。

そしてキスが終わると、彼女の顔は徐々に赤く染まっていく。

またキスをする。

今度は深いキスではなく、軽いものだった。

すると、茅森の顔はどんどん紅潮していき、身体を震わせる。

俺から離れ、その場に座り込むと、荒い息遣いをしながらこう呟いた。

「さて、だったら、今度はこつちを貰おうかあ」

それと共に下着を脱がし、剥き出しになった肉棒をそのまま女性器に挿入していく。

しかし、どう見てもそこは濡れていないようであり、無理矢理と云った形になっていた。

痛みからなのか、それとも快樂なのかわからない声を上げる彼女だったが、奥深くへと入り込んだところで、動きを止める。

しばらくそこでじっとしていたが、やがて彼女は腰を動かし始め

る。

「んっんっんっ、この感覚だ……！ やっぱりこれだよな！」

それは、まるで楽器を演奏するように。

茅森は膣内の肉棒を前後左右に動かしつつ、その快感に耐えているようであった。

次第に、水音が鳴り始めるとともに、喘ぎ声も大きくなっていく。

それに呼応するように、俺もまた興奮していた。

彼女の体液によって滑りがよくなったおかげもあってか、行為自体はスムーズに進むようになってきたようだ。

だんだんと気持ちよくなってきたのか、ただでさえ大きかった喘ぎ声はさらに大きくなる。

そして彼女が果てると同時に、俺にも射精感がこみ上げてきた。

「おお、それじゃ私と一緒にイっつてくれよ!!」

その瞬間、俺もまた、茅森の子宮口にめがけて精を解き放った。

どくどくつと、精液は通り抜けていく。

「……あつ、熱い……」

それをしっかりと感じ取ったであろう茅森は、そのままぐったりとした様子で倒れこむ。

お互いに呼吸を整えた後、茅森は俺の元から離れていった。

「ふうー、ぐちそうさまでした」

そういうと、茅森は勢い良く、俺の上をまるでベットに飛び込む。

「お前なあ」

「ええ、良いじゃん良いじゃん主い」

そう、明るい声で話しかける。

まったく、本当に今までにない配下だな、こいつは。

妖怪退治屋の配下

腰まで伸びているブロンドの髪は、まるで外国人を思わせるイメージを持つ川神舞。

元々、彼女は日本における賞金稼ぎのような立ち位置であり、俺の賞金を狙って、襲ってきた1人だ。

だが、その素質が面白い事もあり、他の奴らと同様に配下となった。最も、結構反骨心があるようで、明石とはまた違った感じであり、面白くはある。

そんな彼女だが、その豊満な胸は、まさしく日本人離れている大きさを誇っており、僅かに動くだけでもこちらを誘うように揺れている。

その事は、本人も気にしているのか、俺の視線に気づいて、少し呆れたような目で俺を見つめている。

「人間を遙かに超える寿命を持つ鬼が、今でも性欲に正直なの」

「自分が気に入った奴にしかないよ、何よりも川神は嫌なのか？」

「そりゃ、まあ、あんただったら、別に」

そう恥ずかしそうに、こちらの視線を離しながら言う。

「だったら、良いじゃないか」

その言葉と共に、俺はそのまま彼女をこちらに引き寄せる。

「んんっ、エッチなのはダメだって、言ってるのに……っ、んあっ、くうっ、キスで身体があ♡」

俺の舌と彼女の舌が激しく絡み合う中、互いに互いの服を脱がせ合う。

服の上からでも分かる程の大きさの胸。

それは、手の平で触るだけでも沈み込みそうな柔らかさを持っていて。

そして、感度も良く、乳首を軽く摘んだだけで甘い声を上げてしまう。

その様子に思わず笑みを浮かべながら、俺は彼女をベッドに押し倒す。

そのまま、彼女の両足を開き、その間に入り込む形で覆い被さった。秘裂には下着越しにもわかるほど愛液が溢れており、それを指先で撫でるように触れると彼女は小さく震えた。

「いやらしい、こんなになってるなんて」

そう耳元で囁きかけると彼女は顔を赤らめながらも否定しない。

「ちがうもん……」

羞恥心からか目を閉じて顔を逸らす彼女に構わず、濡れそぼったパンツを脱がしにかかる。

その際、クロツチ部分に糸を引いていた事に気づき、それをあえて見せつけるかのように目の前に差し出した。

「ほら、凄くびしょびしょだぞ」

「言っちゃだめえ……!」

そんなやり取りをしながら脱がしたパンツを床に投げ捨てると、改めてそこに触れていく。

直接触れるそこは熱を持っていて、割れ目に手を差し入れると更に熱かった。

愛液は粘つくく纏わり付き、陰核に触れる度に甲高い悲鳴のような声を上げる。

その反応を見て楽しむように何度も弄り回していく内に、限界を迎えたのか体が一際大きく跳ね上がると同時に膣口から潮を吹き出す。

絶頂による疲労感からかぐったりとした体を優しく抱きしめながら頭を撫でていく。

しばらくすると落ち着いたようで、呼吸を整えた後こちらを見た。

「ばーか……気持ちよかったけど……その、ありがとう」

そう恥ずかしげに呟く彼女を強く抱き締めた後にゆっくりと唇を重ねる。

そのまま彼女の下半身へと移動していき、今度は直にそこへ顔を埋めた。

むっとする女の匂いと共に、ねっとり舌に伝わる味覚。

それを楽しむように味わいつつ舐め回すと、時折小さな喘ぎが上がる。

しかし、ただ舐めるだけでは物足りなくなってきたので、少しだけ歯を立てて噛んでみる。

途端に漏れる大きな声。

普段では聞けないようなそれに興奮を覚えた俺は貪欲に責め立てていった。

やがて果てた彼女と入れ替わるようにして俺の方の準備を始める。いつもより解す時間が短い事もあってか、すぐに挿入出来る準備が整った。

避妊具を装着してから彼女に覆い被さるようにして体を合わせる。先端を押し当てるとそれだけで吸い込まれるように沈んでいき、根元まで収まった時にはお互い汗塗れになっていた。

ゆっくり腰を動かし始めるとそれに合わせて艶やかな声が上がりに始める。

この体位だと胸も一緒に揺れて非常に眼福だったのだが、動きづらいため今は一旦置いておくことにする。

徐々に激しくなっていく動きに合わせ、結合部から淫靡な音が響き始めた頃。

腕の中に居る彼女は蕩けた表情を浮かべながらもどこか不安気にこちらを見つめていた。

どうやら何か言いたい事があるらしい。

「何だ？」

「あの……ね？ 今日はいっぱい私の中に入れて欲しいなって思ってた……」

「わかった。じゃあ遠慮しないでいくぞ」

返事を待たずに打ち付けを始めると、その衝撃は凄まじく彼女は大きく仰け反る。

肉棒を、膣奥に叩き付ける。

その度に、膣肉は俺の肉棒を締め付ける。

「あっ♡あああっ！♡だめえ……こんな激しいのお……いつちやうう！」

彼女の懇願を聞き流しそのままピストンを続けると、程なく絶頂を

迎えたようで膣内が収縮する。

しかし俺は構わず突き続ける。「待つてツ!! 今いったばかりだからあ!!」

更に腰の動きを速めると彼女がまた昇り詰めていくのを感じる。

「あぐっ!?! ♡まつへ♡むりい、私もう無理だよお……イクウウウ!!」

限界に達したのか身体を大きく痙攣させながら果てたようだ。

そんな彼女の反応を見てもまだ収まらない欲望を叩きつけるように子宮口を突き上げる。

「あっああ、来るっこの感じっ! あああっく♡」

どうやら連続で絶頂を迎えているらしく声にならない叫びを上げながら震えていた。

そして最後に一際大きなストロークで最深部を突いた瞬間にこちらも我慢の限界を迎える。

今まで経験したことのない強烈な射精感を覚えて急いで引き抜こうとするものの既に遅く彼女の中で思い切りぶちまけた。

「ああ、満たされているっこの感じっ♡奥が熱くて気持ちいい……」

俺の顔を見ながらうっとりとした表情を浮かべる彼女に欲情してまた襲い掛かってしまった。

白妹

小柄な体格であり、黒歌の妹である塔城小猫。

彼女を配下を行う過程に関しては、姫島を通じて、こちらに導いた。最初こそ、警戒していたが、仙術を拒否していた彼女を相手をするのは、とても簡単だった。

何よりも気を操り、怒りを支配させるのは簡単だった。

それから、彼女を配下にし、姫島と同じ待遇として、招き入れた。

その容姿は、彼女の妹とは思えず、高校生と言うには、あまりにも幼い容姿をしている彼女はベットのの上に寝転がりながら、脚を上にもげる。

それによつて見えるのは、小猫の丸いお尻だ。そして、太股の付け根が露わになると、そこには可愛らしい水玉模様に移られたパンツがあった。

初めての行為に、小猫は頬を赤く染める。

「その、初めてですがっ、よろしくっお願いしますっ」

小猫は、そう俺に対して言うと、自分の服を脱ぎ始めた。

しかし、着ていた制服は既に前ボタンを全て外し終えており、リボンも既に取り去られている状態なので、小猫はすぐに下着姿になる。

それは、白を基調としたレースのついた上下のセットだった。

小猫は、恥ずかしさからか顔を真っ赤にして俯いているが、それでも脱ぐ手を止めようとしなかった。

小猫は震えた手でブラジャーを外すと、次にショーツへと手を掛ける。すると、そこで一瞬躊躇う様子を見せた後、一気に引き下ろしてしまった。

それにより、小猫の小さな丘の頂点で存在を主張するかのようにつんと上を向いていた桜色の突起が見える。さらに、小さな窪みもまた少しだけ姿を見せている。

「本当に緊張している様子だな」

「その、本当に初めてですから」

俺の言葉に対して、小猫は、首を縦に振って答える。その姿は非常

に愛らしく思えるものだった。

そんな小猫の姿を見ると、俺は我慢できなくなっていく、彼女をベッドに押し倒すように覆い被さった。

同時に、自分の中にある欲望をぶつけるようにして唇を重ねていく。

キスというより、お互いに舌を伸ばして絡めるような行為を繰り返す中、俺の手はゆっくりと小猫の丘に触れる。

小猫はビクツと体を震わせるが、抵抗する事はない。それどころか、自ら受け入れてくれるようでもあった。

丘に触れてみると、小猫の小ぶりだが柔らかい膨らみの感触がある。また、中心では小さく尖っているものがあった。

そのまま手を移動していく、頂上にある突起にも触れてみる。そこに触れた瞬間、小猫はピクンと反応を示してくれた。

どうやら、ここが一番感じる部分でもあるようだ。

ならばと思い、そこを指先で摘む。軽く摘んだだけで、小猫の口から喘ぎ声に近い悲鳴のような短い音が漏れ出た。

ただ、それで終わりではなく、そこからさらに指先に力を入れていき、コリコリとした柔らかさと硬さを感じられるようにしてみた。

その度に小猫の体が痙攣のように跳ねるが、嫌がったりするような感じではない。むしろ、その逆なのかもしれないなかった。

だからといって、あまり弄りすぎる訳にはいかないだろうと思ったため、そこで一端手を止める事にしたのだが……。

「まだ大丈夫か？」

「は、はい。もつと触っても大丈夫です」

小猫からの許しが出た事で、今度は両手を使って両胸をそれぞれの手で揉んでいく。

やはり、片手よりも両手の方が気持ち良いのか、小猫の声もどんどん大きくなっていく。

小学生とほとんど変わらない体格という事もあり、そこまで大きなものとは言えないが、それでもしつかりと柔らかく、弾力もありながらも手に吸い付いてくるような感覚があった。

特に乳首に関しては、手で触れるだけではなく口で味わってみたいとも思ってしまうほどだ。

「あつ、そっそんなにつ、触られたらっ……!」

夢中で愛撫している内に、小猫はもう限界が近いらしい。

それを見ると共に、俺の肉棒は、そのまま真っ直ぐと、彼女の女性器に近づける。

小柄な彼女では、受け止められるかどうか分からない程に大きく勃起している肉棒。

その亀頭が、僅かに触れるだけでも小猫は身体をビクビクと震えさせた。そしてゆっくりと先端から入れていくと、一瞬だけ苦悶するよくな表情を浮かべた。しかしすぐに力を抜くように深呼吸して、何とか耐えている様子だった。

膣内は狭く、熱く、濡れていた。腰を進めれば進める程に、キュウつと締め付けてくる。まるで拒んでいるかのようなようでありながら、奥へと誘うかのような不思議な動きを見せていた。

また同時に、中からは愛液が止めどなく溢れ出してくるため、何とも言えない温かさに包まれている感じだ。

「……あっ♡」

「——っ!」

やがて、根元まで突き入れた瞬間に彼女が甘い声を上げてきた。

締め付ける感触は、これまでの誰よりも強い。

そんな風に思いながら俺は挿挿を開始した。最初はゆっくり、徐々に速く。ピストンを繰り返す度に彼女の中から愛液が流れ出してきた、水音が響き始めた。

「んっ! はあっ! あふうっ!!」

彼女はシーツを強く握りしめながらも必死で声を抑えようとしている。それが可愛くて、つい意地悪をしたくなった。

「……っ!? そ、そこはだめですっ!! やめてくださいっ!!」

彼女の弱い部分を狙って突いてあげると悲鳴のような声を上げる。だがそれでも俺は責める手を緩めない。それどころか、そこばかり集

中的に狙い始める始末だった。

「あああつ！　こんなのダメツ！　おかしくなっちゃいますツ！」

「いいよ？　イツちやいな？」

そう言つて更に激しく突き上げる。するととうとう限界が来たのか彼女は俺を抱き締める。そして――

「はううっ……イツクウー!!」

ビクンツと体を大きく震わせて絶頂を迎える。その拍子に膣内がキュウウツときつく締まったかと思うと大量の精液が放たれた。子宮口に亀頭をぴったり押し付けていたため奥の方へと精液が殺到していく。しかし、それでも射精はまだ止まらない。

「ひゃうん!」

熱い奔流を浴びせられてまたもや達してしまふ小猫ちゃん。そんな様子に構わず全てを出し切ろうと腰を突き出す。数分後ようやく収まる頃には二人の息は完全に上がっていた。荒い呼吸を繰り返しながら余韻に浸っている小猫ちゃんからゆっくりと引き抜くと彼女の秘処からはゴポツという音を立てて白濁とした粘液が流れ出る。

幼いその身体から感じるそれを、俺はゆっくりと見つめていく。

小さな狩人

人間の一番の力は知識である。

それを教えたのは、俺の配下の中の1人であり、最も厄介な人物であるグリムだ。

グリムは、既に何百年と生きている狩人である。

魔女の呪いを解く為に旅をしており、俺の配下になったのも、それが一つのきっかけだった。

小学生と変わらない体型をしていながら、こちらを真っ直ぐと見つめる鋭い視線を向けるグリム。

「えっと、グリム」

その視線に対して、俺は思わず問いかけるが、それに対して、グリムは無言のまま、勃起している俺の肉棒に唇から触れる。

「はむっ……はむうっ……ちゅう……ちゅぽっ……ちゅぽっ……」

唇から触れると共に、ゆっくりとその小さな口でまずは亀頭にキスを行う。

大きさを確かめるように、数度触れ合う程度のキスだ。

そのキスを終えると、グリムは口を開くと共に、そのまま亀頭から肉棒を飲み込んだ。

小学生と変わらない小さな口という事もあってか、亀頭を飲み込むのがやっとなかった。

そのまま、まるで棒付き飴を舐めるように、舌先でゆっくりと。

勃起した肉棒の大きさに対して、グリムは涎をゆっくりと馴染ませると共に、そのまま口内に徐々に肉棒を飲み込んでいく。

「んぐっ……ふうっ……おっきい……じゅるっ……」

グリムの小さな口から溢れる唾液の音と、時折漏れ出す吐息のような声だけが部屋に響く。

しかし、それは決して嫌な音ではなく、むしろ、もっと聞きたいと思ってしまうような淫靡なものだった。

そして、完全に肉棒を頬張ったグリムは一度口を離すと、今度はゆっくりとストロークを始める。

「ああっ……気持ちいいよおっ……」

幼い少女の顔をしたグリムにフェラチオされているという事実だけで射精してしまいそうな程興奮するのだが、更にその幼い顔立ちには似合わない妖艶な雰囲気を出しながら肉棒をしゃぶられるというのは何とも言えない背徳感があった。

そんな事を考えている間も、グリムはゆつくりと肉棒を口に含んだまま顔を上下させ始める。

「あっ……ううっ……」

あまりの快感に耐え切れず、俺は小さく喘ぎ声を上げてしまう。

そんな俺の声を聞いたグリムは嬉しそうに微笑みながらも、そのストロークを続ける。

「あむっ……れろっ……んくっ……ちゅぱっ……じゅぷっ……」

ゆつくりとしたストロークだが、それはそれで良い刺激となる。

ねっとりとした舌使いによる快楽が全身を襲い、腰が砕けそうになる。

しかし、グリムはそのストロークを止めない。

まるで肉棒の味を楽しむかのようにじつくりと肉棒全体を味わいつつ、何度も何度も繰り返す。

やがて、限界に達したのか、グリムの動きが激しくなり始めた。

「あっ！ 出る！」

我慢出来ず、そのまま精液を放出する。

どくんっ、どくんっ と脈打つ度に大量の白濁色の液体がグリムの口内へと注がれていく。

グリムはそれを吐き出す事無く、全て飲み干していった。

「んぐっ……ぐくっ……ぎゅっ……」

喉の奥から絞り出されるような音と共に、グリムは全てを飲み干し終えたようだ。

しかし、そこで終わる訳では無いらしい。

「ふう、本当に容赦なく出してくるな、お前は」

そう、口の端にある精液をグリムは指先で拭い取りそれを舐めるという一連の動作を行ったのだ。

同時に、その身体は一瞬で成長した。

先程まで、小学生同然だった容姿から、高身長の女性に。

胸の大きさも、メロンやスイカと同じぐらいの爆乳と化していた。着ていた浴衣も大きく膨らんでおり、前は完全に開いてしまっていた。今にも零れ落ちそうだ。

その下半身には白い下着を身につけているものの、それすらも大きく張り詰めていて今すぐ脱げば大変な事になるだろう事が分かるほどだ。

グリムは、人を子どもの姿に変える呪いをかけられている。

グリムは魔女に呪いを掛けられた為、普段は大人から子供の姿でいる。

だが、こうした、外部からの魔力提供を受ければ、本来の大人の姿に戻れる。

狩人を思わせる冷静な表情は変わらないが、その瞳の奥からは隠し切れない情欲が見え隠れしている気がする。

そして、俺はその姿を見た瞬間に再び勃起してしまった。

「さて、本番はこれからだからな」

それと共にグリムは俺を押し倒す。

既に完全に裸になつているので押し倒されれば当然の事ながら丸見えになるのだが、そんな事は気にならない程度に興奮しきつていった。

グリムはゆっくりと唇を重ねてきた。

柔らかい感触と同時に口の中に生暖かいものが入ってくる感覚に襲われる。

それは、舌だ。

蛇のように舌を絡められ、吸い付かれる。

唾液を交換するようにお互いの舌を絡ませていくと、先ほどまでのキスよりもさらに強い快感に襲われ始める。

まるで、体中の神経がそこに集中したかのような感覚に陥る程、強く刺激される。

グリムはキスをしながら片手で胸板を撫でてくる。

やがて、互いに完全に密着すると共に、俺の肉棒は、そのまま食われるように、グリムの膣内へと吸い込まれる。

「んっ……………」

突然襲ってきた圧迫感に耐えかねたのか、グリムから小さな声がかかる。

しかし、その声からは苦痛の色は感じられない。むしろ——気持ちよさそうな声だった。

そして、自分の秘所に何かが入っている事に気づいたのか、体を一瞬強張らせるものの、すぐに受け入れるかのように力を抜く。

俺は、少しずつ腰を動かし始める。

「あっ……………」

すると、今度ははつきりと聞こえてくる艶めかしい吐息。

それを聞いた瞬間、理性が崩壊しそうになるもなんとか抑える。

ゆっくりと、優しく……………できるだけ負担をかけないように動く。

そうしているうちに徐々に慣れてきたのか、徐々に締め付けがきつくなつていくのを感じる。

「何を遠慮しているんだ」

そんな俺の思考を読んでいたように、グリムは強く抱き締める。

「私達の間には、隔てる物など無いだろう？」

それを言われてしまえばどうしようもない。

今まで我慢していた分を取り戻すように激しく動いた。

肉と肉がぶつかり合う音が響く中、俺は本能のままに動き続けた。

そしていよいよ限界に達しそうになったとき、俺の動きに合わせてグリムも小さく喘ぎ始めた。

その声を聞いているだけで頭が沸騰しそうだ。

「もうっ……………あっ！ ダメだ！ ……いくぞ！」

「ああ、来てくれ。私の中に全て注いでくれ！」

ついに耐えきれなくなった俺は一番深いところで射精した。

「ぐううッ!!」

「ああアアアア——ッ!!!」

ドクンドクンと脈打ちながら大量の精液を吐き出すと同時にグリ

ムは背を大きく仰け反らせ一際大きな声で鳴いた。

「ハアツ……ハアツ……」

ようやく長い放出が終わったときには二人の息は完全に上がっていた。

妖怪天使

ガブリエル。

「四大熾天使」の1人。

ウェーブのかかったブロンドで、おっとり風でスタイル抜群。

天界一の美女にして、天界最強の女性天使でもある。

彼女の乳は男の誰からも触れられたことも、直接見られたこともない。

目にしたことのある女性天使は「至上のお乳」と評されている。

そう、男は誰も見る事はなかったはずのおっぱいは、眼前で露わになっ
ていたのだ。

目の前に突き出された爆乳を目の当たりにして俺は固まっていた。

その巨大な乳房を包む衣服はなく、白く滑らかな肌があらわになっている。

そしてその下腹部から伸びる肉棒にもまた白い布地は纏われていなかった。

俺と目が合ったガブリエルさんは頬を朱色に染めていた。

「この目を、待っていました」

彼女は天使であり、聖書の教えにおける、善を体現する存在であり、
実際、過度の欲望などを持つと墮天使に墮ちる存在である。

だが、それは以前までの彼女である。

今のガブリエルである彼女は、俺の配下となった事で妖怪という存在
が入り混じった。

それによって、彼女は天使のまま、人間のような欲を持ち始めたのだ。

「……あの、私の身体を見つめたまま黙ってしまっていますけど
……もしかして、私の身体に何か問題でも？」

不安げな表情を浮かべながら、俺へと問いかけてくるガブリエル。

その言葉を受けて、俺は笑みを浮かべる。

「そんな訳ないだろ、天界一の美女にして、天界最強の女性天使のガブ
リエルに対して不満なんてあるはずがないさ」

俺の言葉を聞いた瞬間、ガブリエルの顔には満面の笑顔が浮かんだ。

「ありがとうございます！ 私もあなたの事が大好きです！」

俺に向かって抱きついてきた彼女を受け止めると、そのままベッドに押し倒した。

「んう……」

押し倒されたガブリエルは目を閉じて唇を突き出した。

それに応えるように、俺は自分の唇を重ねる。

互いの舌を絡ませ合い、唾液を交換するかのように吸い合う。

息継ぎのために口を離すと、銀の糸が引いた。

ガブリエルは再びキスを求めてきて、今度は軽く触れるようなキスをする。

俺は彼女の胸元に手を伸ばし、優しく撫で回していく。

「ふぁ……あぁ……」

吐息と共に漏れ出る甘い声を聞きながら、柔らかさと張りを兼ね備えた大きな乳房を下から持ち上げる。

手の平に収まりきらないほどの大きさを誇る乳房をゆっくりと揉んでいく。

その度に形を変える乳房の先端にある突起物が徐々に硬くなり始めていく。

それを指先で摘まむと、彼女は大きく体を震わせた。

さらに強く摘まんでは引っぱり、時には転がすようにして弄ぶ。

「あつ……くつ……あぁ……」

敏感な部分を責められる度に抑えきれない喘ぎ声を上げるガブリエル。

その反応を楽しむために、俺は両方の乳首を執拗に攻め続ける。

「ひゃうん!? ?そ、そこはダメえ……」

乳首への愛撫だけで絶頂を迎えたのか、腰が大きく跳ね上がった。「もうこんなになってるじゃないか」

そう、俺はガブリエルの勃起したクリトリスを押し潰してやると、彼女はビクンツと身体を大きく仰け反らせた。

「ああん♡イツちやったあ♡もつとお……いっぱい触ってください♡」

甘えた声でおねだりしてくる彼女に興奮しながら、俺は秘所へと手を伸ばす。

既にびしょ濡れになっている膣内に人差し指を差し込むと、それだけで彼女は達してしまったようだ。

痙攣する膣内から引き抜いた指には、大量の愛液が付着していた。俺はそれを舐め取ると、ガブリエルは恥ずかしげもなく股を広げてみせた。

「早く挿れて下さい……。あなたの大きいのが欲しいんです……」

淫らなお願いをされた俺はズボンを脱いで肉棒を取り出すと、一気に挿入した。

子宮口まで突き刺さるような衝撃にガブリエルは歓喜の声を上げた。

「ああああ!! すごい! 気持ちいいですう!」

パンパンという肌を打ち付ける音とともにピストン運動を行うと、結合部から溢れる愛液が飛び散っていく。

そのまま正常位で交わり続け、やがて限界が訪れた。

「出すぞ……全部受け止めるよ?」

「はい! 出して! 中にたくさん出してください!!」

俺はガブリエルの中に射精すると、それに合わせて彼女も絶頂を迎えたようだった。

「ああっイクツ! イツちやいますっ! ああんっ!!!」

膣内が激しく収縮し、精液を全て搾り取ろうとするかのように肉棒を強く締め付けてくる。

あまりの快感に耐えきれず、思わず声が出てしまう。

「ぐおっ……出る!」

最後の一滴まで絞り尽くされるような感覚を覚えながら、俺は果てた。

「ふう……」

「ああん……」

ようやく落ち着いたところでガブリエルの中から引き抜くと、栓を失ったそこから大量の白濁した液体が流れ出てきた。

それをティッシュで拭き取ると、彼女は満足げに微笑んだ。

「ありがとうございます。これで私はもう貴方様から離れられませんね♡」

そう言うと足を広げ、先程、俺が精液を出したばかりの女性器を広げながらこちらに見せつける。「どうぞお好きにしてくださいませ♡ 私も早く貴方様に孕まされたいですから♡」

「ああ……わかったよ。じゃあお言葉に甘えて……いただきます！」

再び硬さを取り戻した陰茎を再び挿入すると、ガブリエルはその体を大きく仰け反らせた。その動きに合わせるように彼女の大きな胸が激しく揺れ動く。

まるで別の生き物のようにビクビクと脈打つ膣内の動きに合わせて俺はゆっくりと腰を動かし始める。

先程と同様の激しいピストン運動ではなく、亀頭で子宮口をこねる様な優しい刺激を与えていく。

「ああっ！ んあっ！ あんっ！」

徐々に激しさを増していく快感に耐えきれなくなったのか、ガブリエルの口から甘い声が漏れ始める。

それと同時に膣内の締め付けが更に強くなっていく。俺はそれを耐えながらさらに激しく責め立てる。

そしてついに限界を迎えたガブリエルは体を震わせて絶頂を迎える。

「ああっ!! イクッ!!」

全身を強く痙攣させながら大量の潮を吹き出すと同時に今まで以上に強烈な力で俺自身を締め付ける。そのあまりの強さに一瞬気を失いそうになるも何とか堪えると俺はそのまま射精する。

ドクンドクンという鼓動と共に熱い精液が大量に流れ込んでいく。

長い射精が終わると俺はゆっくりと引き抜く。

引き抜かれた瞬間、栓を失った秘裂からドロリとした白濁液が流れ出した。

それを見た俺は満足げな笑みを浮かべる。

「ふう……最高だったぜ」

そう言いながら俺は脱ぎ捨てていた服を身につけ始めるとガブリエルの方を見る。

すると彼女は未だに快楽の余韻に浸っているのかビクビクと体を痙攣させていた。その姿があまりにもエロかったので思わずムラツとする。

狸の忍者

ムジナが、俺の配下の中でもある意味、特殊な人物だ。昔からの知り合いの1人であり、狸の一族の忍だ。

その知り合いの伝手もあって、俺の元で配下として迎えた。そんなムジナは、これから行う行為に対して、戸惑いを隠せない様子で見つめていく。

黒刀のムジナと呼ばれており、忍者としての実力は高い。

しかし、未だに幼さが抜けていないのか、布団の上で寝転がる俺に對して、甘えるように抱き締めている。

「別に、逃げるつもりはないが」

「……それでも、嫌」

身動きが取れない事もあって、少し退いて貰おうと手を動かす。

しかし、ムジナは動く気はないのか、そのまま抱き締め続けていた。

普段のクールな様子からは考えられないような、可愛らしい笑顔を浮かべて、頬ずりをしている。

「どうしたんだ？」

「……何でもない」

そう言いながらも、嬉しそうな表情を浮かべながら、身体を押し付けるようにして、顔を擦り付けていた。

その様子を見ていて、何だか犬のような感じがすると思ってしまう。

だが、彼女自身は狸。

だから、猫のようにすり寄っているという事は間違いないだろう。

これまでの任務の鬱憤を晴らすように、尻尾も揺れ動いている。

まるで、犬が遊んで欲しい時のような状態に見える。

ただ、このままだと動けないので、何とかしてもらおうと思った。

そんな俺の思いとは裏腹に、彼女は俺の身体をゆっくりと舐め始めた。最初は首筋から胸元へかけてだったが、徐々に下の方へと移動していく。

ズボンを脱がされそうになったところで、さすがに焦って声をかけ

る。

すると、ムジナは顔を上げてこちらを見てきた。

目つきが悪く、いつも不機嫌そうにしている事が多いのだが、今は違うようだ。

上目遣いになりながら、潤んだ瞳でじっと見つめてくる。

そして、また顔を近づけると、今度は舌を使って耳たぶや首を舐め始める。

先程までとは違う感触を感じ取り、思わず声を出してしまう。

それを聞いているムジナは、嬉しそうに微笑むと、再び口の中に含んできた。

唾液によって濡れており、熱くなっているせいか、変な感覚に襲われる。

時折聞こえる水音を聞きながら、俺はされるがままになっていた。

それからしばらくして、ようやく満足したのか、ムジナは口を離す。

「まったく、ムジナはこういう時は甘えてくるよな」

「……嫌だった？」

「いや、別にそういう訳じゃないけど」

「じゃあ、良いよね」

そう言うと、ムジナはまた抱きついてきて、キスをする。

今度は最初から舌を入れてきていたが、抵抗する事なく受け入れた。

しばらく経って、ムジナは蕩けた表情になっていた。唇同士が離れ

ると、名残惜しそうな表情になる。

「もうちよつとだけ、したい」

「それは構わないぞ」

ムジナは、そう言ってまた抱きつくくと、キスを求めてきた。

俺は苦笑しながらも応じる事にした。

それから少しの間、彼女の好きなようにさせる事にしたのであった。

抱き締めている間にも、少女の幼い乳房が押しつけられていたり、太股に触れてたりする。

「あっ……ああ……!!」

そしてついに限界に達したのか、彼女は一際大きな声をあげて達してしまったようだ。

彼女の痙攣する秘部から白濁とした液体が流れ出しているのが見える。

「ふう……。気持ちよかったよ、ムジナ」

そう言っただけで俺は彼女を抱きしめた。

「はいっ、私もです……」

ムジナは息を整えてから答えた。

彼岸花

千束は、裏で活動する人物だ。

裏の世界でも、暗躍する事が多く、その気配を消す才能と銃を扱う才能は、配下の中でもかなりの腕を持つ。

だが、そんな才能とは裏腹に、彼女自身の性格はかなり明るい。

そんな千束は仕事がない時は、こうして甘えてくる事が多い。

黄色みがかった白色の髪少女、千束は、そのまま俺に抱き締めていた。

「いやあ、結構久し振りだねえ」

俺は頭から耳へとその指先を移動させて、柔い胸の輪郭を、とناぞるように弄ぶ。

脳髓に針金が突き刺さったような、切なく、同時に鋭い刺激に千束と子宮が疼いて、身体を震わせた。

「んっ……あふう……♡」

「はあ……お前のおっぱいも大概だよな……」

むぎゆうつと抱きついてくる彼女の背を抱きつつ、今度は首筋まで指を走らせた。

そして、耳に息を吹きかけるように囁く。

「ひゃあん♡」

「ほら、お前、昔より感度上がってないか？」

「だ、だってえ……」

「あの時は耳元で喋るだけでビクビクしてたよな……。まあ今もただど……」

「ふわああああん♡」

耳の中に舌を差し入れて、ゆっくり舐めると、彼女は快感に身を振りながら、甘い声で鳴いた。「んっく……！　じゅぽ……ちゅぷ……」

俺は舌の動きを止めずに、左手で乳首を摘んで転がす。

「んあっ……！　駄目っ……！　そんなにしたらくすぐったくて死ん

じやいます……！」

「嘘つけ……気持ちいいんだろ？　素直になれよ」

耳の中をねっとり責めると、彼女の身体が大きく震えた。

「ああっ!? はああ!! だめえ! じっくりう!!」

隆奥から潮が吹き出して、布団に大きな染みを作る。

「相変わらずイキやすいなお前……。こんなんで大丈夫かよ……?」

「しようがないでしょ、まあ、気持ち良いから、良いけどね」

そう、千束は笑みを浮かべながら言った。

「全く……可愛い奴め」

そう言っつて、彼女にキスをしてやる。

すると千束の顔が赤くなっていた。

彼女は顔を逸らすと、ポツリと言った。

その仕草が非常に可愛らしくて、つい愛おしさが込み上げて来る。

「……本当に可愛いぞ」

「うーん……。なんか悔しいなあ」

千束は頬を膨らませると、そっぽを向いてしまった。

「じゃあもつと好きになって貰えるよう頑張らないとな?」

ニヤリとして言うと、千束の目が爛々と輝いた。

「うん! そうだね!」

「お手柔らかに頼むぜ?」

「わかってるよお〜♪」

そう言いつつ、彼女は俺のズボンに手をかけた。

俺達はお互い服を脱ぐと、ベッドの上で唇を重ねた。

彼女の柔らかい肌に触れているうちに興奮したのか、心臓が激しく

脈打ち始めた。

千束はそれを知ってか知らずか、俺の背中に腕を回してくる。

そしてゆっくりと顔を寄せて来た。

口付けの後、彼女が囁く。

吐息混じりの声音には熱が含まれていた。

「ねえ……」

俺はそれに応えるように、首筋へと舌先を伸ばす。

そのまま軽く吸い付くと、千束の口から吐息まじりの小さな声が漏れた。

俺はそれに気をよくし、今度は胸の方へ手を這わせる。

小さくも形の良い乳房を揉む度に、心地よい弾力を感じた。

指先が先端に触れると、そこは既に硬くなっていた。

そこを強めに押し潰すと、「ああん！」という甘い悲鳴と共に腰がくねる。

それを宥めるかのように優しく撫でまわしていく。

そして両手の親指を使って、その先端を同時に刺激してやった。

「ひゃふうっ……！」

背骨を突き抜けるような快感に、千束は喉の奥から絞り出すようにして喘いだ。身体を痙攣させながら大きく仰け反ると、股間からは透明な液体が大量に溢れ出した。

「もうイツてしまったのか？ まだ始めだぞ？」

「だってえ……。だって凄いいんだもん」

肩で息をしながら呟きつつ、千束は恥ずかしげに身を振った。

「もっと気持ち良くなりたيدらう？」

俺は微笑みかけると、彼女を抱きしめる。

「勿論っ♡」

その言葉と共に、彼女の女性器に肉棒を沈めていく。十分に濡れていたおかげで簡単に根元まで入った。

「あっ……いいいい……」

千束は熱い吐息を漏らしながら、俺を見つめてくる。その瞳には期待の色があった。

俺はそれを見届けてから抽送を開始する。龟头が膣内を押し広げる度に大きな水音が響く。

「あああっ……んッ、やア、気持ち良い……ふわっ!？」

更に激しく突き上げると、千束の口から甘美な響きを含んだ声が漏れ出てきた。結合部から絶えず聞こえて来る湿った音色は、より一層激しさを増していった。

「あっ！ あんっ！ すごおいつ！ しゅごいよおっ!!」

快楽に酔い痴れる千束だったが、やがて絶頂を迎えようとしていた。

俺はラススパートを掛けるべく、ピストン運動をより速くする。それと同時に乳首を摘まみ上げた。

「ひゃううっ!! あんっー!」

ビクンつと身体を震わせると同時に、膣内の締め付けがきつくなつた。どうやらイツたらしい。

だが俺はそのまま行為を続けていく。すると、すぐに千束の反応が返ってきた。

必死で懇願してくるものの、俺は構わず腰を打ちつけ続けた。

そして……ついにその時が訪れる。

「あああーッ!!」

二度目の射精を受け止めると共に、再び達してしまったようだ。

その証拠に、今度は潮を吹き出していた。

激しい快感からか、千束は大きく肩を上下させている。

「はあ……はあ……あふう……」

余韻に浸るかのように瞳を潤ませていた。頬は赤く染まり、肌からは玉のような汗が浮き出ている。

その表情はとても扇情的で、思わずまた勃ってしまいそうになったほどだ。

しかしさすがにこれ以上は千束の身体も保たないだろう。

「んくう……っ」

ゆっくりとペニスを引き抜くと、栓を失った秘裂から白濁液が流れ出す。

かなり量が多かったのか、割れ目を押さえても逆流してきた。

どうやら随分と感じてくれたらしい。

そんな感想を抱いているうちに、千束の目蓋が静かに閉じられていく。体力の限界だったようだ。

「寝ちまったみたいだな」

俺は一息吐きつつ独りごちると、千束の隣へ横になる。

そして裸のまま抱き締めてやった。

柔らかな温もりが伝わってくる。

「お疲れさん。ありがとうな、千束」

俺は感謝の言葉と共に優しく頭を撫でてやる。

未来のウサリア

その容姿で、最も目立つのは間違いなく頭から生えているウサ耳だろう。

バニーガールを思わせる白いハイレグに黄色いジャケットを身に纏っている彼女の名はウサリア。

数多くの配下の中でも、かなり変わった経歴を持っており、謎が多い。

ウサリア自身曰く、本人は未来から来たらしい。

だからこそ、その謎は多くあるが、確かに俺の持つ駒の反応があった未来から来たという謎の女性である。

その為、俺はその駒に関しては、今は懐に仕舞っている。

この時代の、本人と会うまでは。

「いやあ、それにしても、過去のあなたもやっぱり格好良いぴよん」

そう言いながら、まるで子供が親に懐くように俺に抱き締めてくる。

ショートカットに切り揃えられている金髪と共にウサ耳を揺らしながら、抱き締めるウサリアのむっちりとした柔らかさが俺を包み込む。

「本当に知り合いなのか？」

「ええ、勿論」

俺の疑問に対して、ウサリアは満面の笑みを浮かべながら、答える。

その言葉に嘘偽りない事は分かる。

しかし、俺はこのウサ耳少女と会った記憶などなかった。

「それで、俺に抱きついて、何をするつもりだ？」

「ふふっ、そんなの決まっているじゃない」

そう、発情した瞳で、俺を見つめる。

「兎は寂しいと死んじゃう。」

だから、その身体で、思いっきり寂しさを癒して貰おうかなって思ってる」

そう言うと、ウサリアは自らの唇を俺の唇へと重ねた。

それはキスと呼ぶにはあまりに荒々しく、舌が絡み合い唾液が混ざり合う。

そして、息継ぎのために離された口から垂れ落ちる糸。
ウサリアは熱を帯びた視線で、俺を見据える。

「ああ……我慢できない！　ねえ、今すぐしょ？　ここで！」

「はあ、まったく」

俺が呆れながら、ため息を吐いている間にも、ウサリアは衣服を脱ぎ始める。バニースーツの下からは、豊満な乳房が現れる。

さらにスカートを捲ると、股間の割れ目まで丸見えになる。

「ほら、こんなになってるんだよ」

そう言っつて、ウサリアは自らの手で陰部を広げて見せる。

そこは既に濡れており、ヒクついていた。

「本当に、とんでもないなあ」

そう言いながら、俺もまた、ウサリアに誘われるがままに肉棒を剥き出しにする。

亀頭から、ゆつくりと触れる程度に女性器に挿入する。

「んっ……」

それに合わせて、甘い声を上げるウサリア。

そのまま奥深くへ差し込み、子宮口へと到達させる。

「凄い……お腹の中一杯だよお」

膣壁は、俺のペニスを強く締め付け、搾り取ろうとしてくる。

「動くぞ」

「うん」

ウサリアの言葉を受けて、俺は腰を動かし始める。

膣内を押し広げるようにしてピストン運動を繰り返す度に、結合部から漏れ出る愛液が飛び散っていく。

パンツ、パンツという音が部屋中に響き渡る。

そして、その音が大きくなるにつれて、徐々にスピードを上げていく。

絶頂に達しそうになる直前、ウサリアの両足を掴み、真上に向けて持ち上げる。

俗にいうまんぐり返しの姿勢となったウサリアの膣内はより一層強く収縮する。

「あつ、んっ、凄いつ、お腹の中にどんどん入り込んでいくっ♡」

ウサリアが、俺の肉棒の感触を受けた影響なのか、ウサギ耳と尻尾がピンつと伸びていた。

しかし、それも束の間だった。

再び動き出した俺の動きにより、その快楽によって意識を持って行かれてしまったようだ。

だが、それでもなお、彼女は懸命に耐えようとしている。

「もっもっもっとなんたのが、欲しいぴょんっ♡」

語尾も忘れて、必死に求めてくる姿はとても可愛らしいものだった。

その姿を見た俺は更に激しく動かしていく。

「あつ♡もうだめええっ……イクうううううう!!」

絶頂に達したと同時に、大量の潮を吹き出す。

それと同時に、俺の方も限界を迎えてしまい、精を解き放つ。

どくんどくと脈打つように射精していく中、ウサリアはビクビクと身体を痙攣させていた。

「ああ……熱いいいいっ!! すごい出てるよおおおっ!」

ウサリアはそのまま気絶してしまったのか、ぐったりとしている。ずるりと引き抜くと共に、ごぼつと白濁とした液体が流れ出していた。

その光景を見て満足した俺は、ウサリアの隣で横になる。

隣では、疲れ果てた様子のウサリアの姿があった。

その頭を優しく撫でると、彼女は気持ち良さそうな表情を浮かべていた。

そんな彼女を見つめているうちに眠気に襲われた俺は瞼を閉じるのであった

天使と悪魔

三大勢力において、眼前の光景を見て、現実かどうか疑う者は多くいるだろう。

それ程に、その光景はあまりにも現実離れをしており、同時に憧れるだろう。

眼前に見える光景。

それは天使の中でも上位の存在であり、四大熾天使の一人のガブリエル。

そしてもう1人は、魔王サーゼクス・ルシファアの妻であり、グレイフィア・ルキフグス。

本来ならば、敵対しているだろう2人の美女。

その美女が、眼前にある俺の肉棒に対して、互いにその豊満すぎる胸で、まるでサンドイッチのようにして挟んでいる。

そうして、2人の豊満な胸から僅かに出ている俺の亀頭を求めて、2人は舌を伸ばし、舐めている。

「れろお♡ちゅっ♡んちゅ♡」

「ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡」

普段の彼女達を知っている者達では考えられない程に淫らだ。

俺はそんな光景を見ながら、思わず息を飲む。

お互いに全裸の状態で、グレイフィアとガブリエルは互いに擦り合わせながら、俺の肉棒を挟んでいた。

2人とも俺の肉棒を挟みながらも、互いの陰唇を刺激し合う。

「はむっんちゅ、ガブリエル様、少しお疲れのようですから、ここは私に任せて」

「んちゅ、大丈夫よ、それよりもグレイフィアこそ、少し休んだら、どうですか？」

互いに気を遣っている風に言いながらも、その本音は俺の肉棒を独り占めになりたい。

ただそれだけである。

だからこそ、俺の肉棒をより気持ち良くさせた方が勝つ。

そういう思惑があるように、2人共動き出す。
まず最初に動いたのはグレイフィアの方だった。

グレイフィアは自身の舌を出し、それを俺の肉棒の先端に走らせるようにして、刺激してきたのだ。

普段のメイドとして、奉仕を行う事も多くあり、それはとても丁寧だ。

何よりも、人妻ならではの色気なのか。こういった行為には慣れておらずとも、どこか初々しい雰囲気も残しつつ、それでもこちらの反応を確認するかのように舌を使う。

それがまた、可愛い印象を与えてくると共に、興奮を覚えさせるのだ。

だが、それだけで終わるような相手ではない。

グレイフィアの攻撃に負けじとばかりに、今度はガブリエルが動く。

彼女の方もまた同じように舌を出して、先端を攻めてきた。

こちらも基本的には同じだ。

しかし、彼女は天使。

その事もあってか、非常に繊細であり、それでいてゆっくりと味わうような、優しい責め方であった。

その事がより、焦らすかのような快感を与えてきてくれる。

「じゅるうー！ レロオオー！」

突如、ガブリエルが激しく吸い始めた。

横から完全に龟头を奪われる形で、グレイフィアの口から肉棒が離れる。

そのままガブリエルは更に激しく吸ってきた。

グレイフィアの方はというと、まるで龟头を自分の口の中へと入れ込む様にしながら、舐め回し始めて来た。

しかも、ただ舐めるだけではなく、時折吸い上げるようにしてくる。

それにより、先程のガブリエルとは違った刺激を受ける事になったのだが……これがまた良い。

そして、どちらかと言うならば、ガブリエルの方が積極的に激しい

のに対して、グレイファイアの方はというと、まるでねっとりしているというか……そんな感じなのだ。

2人の異なる攻め方に俺は、段々と余裕が無くなってきた。

(くっ……これはマズいな)

このままでは先に果ててしまうだろう。

そう思いながら、必死に耐えていると、遂に限界が訪れる瞬間が訪れた。

一気に射精感が込み上げてきて――。

「もう我慢できないぞ……」

そう言いながら、俺は腰を突き出すようにして動かした。

それが合図に、俺はそのまま衝動のままに、精液を吐き出す。

すると、それを待っていたのか、2人は同時に口を離した。

勢いよく発射された白濁色の液体が、それぞれの顔や胸元に降り注ぐ。その光景を見ながら、俺は大きく息を吐いた。

グレイファイアもガブリエルも、頬を赤く染めながらも嬉しそうな表情を浮かべて微笑んでいる。

それから少しして、2人とも身体に付着した精液を手に取り出した。

「んっ……」

「ああ……」

手に取り出されたそれは、糸を引きつつ床へと垂れていく。

それを見て、思わず生唾を飲み込んだ。

2人の美女の口から出たものだからだろうか、とてもエロく見えるのだ。

「ふふ……ご主人様は本当にお元気ですね」

「うむ、我にもこんなに出るとは思わなかったぞ？」

「いや、まあ……」

確かに、いつもより射精量が多かった気がする。

それだけ興奮していたということなのだろう。

そんなことを思いながら視線を下に向けると、そこにはグレイファイアの手にあつた精液が顔の近くまで来ていた。

そして、彼女はそれをゆっくりと口に含んだ。

「ちゅぱ……ご主人様の濃厚なお味です♡」

そう言っつてグレイフィアとガブリエルは妖艶に笑う。

その様子はとても淫靡で美しいものだった。

だが同時に、凄まじい背徳感に襲われる。

それがたまらなく心地良かった。

「これは、ふふっ、まだまだ出そうですね」

「ええ、まだまだ、続けられそうで、本当に」

そうグレイフィアとガブリエルの2人は互いに笑みを浮かべる。

蜘蛛服の猫

薄い巫女を思わせる着物を身に纏っている小猫。

その衣装を作ったのは何を隠そう、白織である。

彼女は蜘蛛という事もあり、糸を自在に出す事ができる。

その為、そう言った服を作るのも趣味である。

そして、その日作った巫女服もまた、白織が作った作品である。

そうしていると、膝の上に座って顔色を窺っていた小猫だったが、

俺が怒っていないとわかるとすぐに笑顔に変わった。

小猫は俺の肉棒を掴むとゆっくり手を上下させ始めた。

膝の上の小猫のやわらかな尻の感触ですでに臨戦状態だったので軽く刺激されただけでうめき声をあげた。

「…………ふう…………ああ」

俺の反応に気をよくしたのか、小猫はさらに強く掴む。指先がカリ首の裏側に当たる度にビクンツと体が跳ねてしまう。

小猫の手練手管によってあつという間に射精寸前まで追い詰められてしまった。

しかし俺は寸でのところで腰を引いた。

そして右手を小猫の小さな頭に伸ばしてその髪を優しく撫でる。

「上手だな小猫、でもまだだよ」

そうしながら、俺はそのまま小猫の割れ目に龟头を押し当てる。

「えっ…………」

驚愕する小猫に構わず、ゆっくりと前へ体重をかけるようにして押し込んでいく。

「んっ！…くうう…………」

苦痛に耐えるような表情の小猫だが、無理矢理に押し込む事はせず、今度は少し引き抜いてから再び奥へと突き入れた。

「ひっ！」

悲鳴を上げる小猫に俺は尋ねる。

「痛いかな？」

「少しだけ、だけど、これが気持ち良いです♡」

それを聞いて安心すると少しずつピストンを始めた。最初はかなりきつかったが、しばらく続けているうちに徐々にスムーズになつていった。

「あ、う、あああ……もつとお……」

快感を感じているのか、顔を真っ赤にして喘ぐ小猫に興奮を覚えつつ、さらに速度を上げていく。俺が一際深く突き入れると、小猫は背中を大きく仰け反らせて絶叫を上げた。

「あっ……いい……すごい comes……イツちやいますう!!!」小猫はそのまま体を痙攣させて絶頂を迎えた。俺はそんな小猫を抱きしめながら精液を放った。

俺は一旦肉棒を引き抜くと小猫をそのままベッドの上に寝かせた。絶頂の余韻に浸って呆然としている小猫だったが、俺が肉棒を見せつけると目を見開いて喉を鳴らした。

「もう終わりですか？ まだ私は満足してませんよ？」

そう言つて俺の前に座り込み、自分の手で肉棒を掴むと口に含んだ。

さつきよりも熱く感じる口内で舌を絡ませてくる。亀頭を舌先で転がすように舐め回し、先端を強く吸い上げる。先ほど放ったばかりだというのにすぐにまた硬くなつていく。

小猫は裏筋にキスをしながら根元に向かって舐め下ろしていく。そして一気に喉の奥まで呑み込んだ。唇と舌で包み込みながら前後に動かし始める。時折強く吸われると我慢できなくなりそうだ。

俺は小猫の口から肉棒を引き抜いた。名残惜しそうな声をあげる小猫の顔の前にいきり立ったままの肉棒を突き出す。小猫はその先端にチュツと音を立てて軽くキスをする。

「次はどうすればいいですか？」

小猫が期待に満ちた眼差しで聞いてくる。

「じゃあ、ここに跨つてくれるか？」

俺の言葉に一瞬キョトンとした顔になるも、その意味を理解して小猫は頬を赤く染める。

「わ、わかりました」

恥ずかしげな様子そのまま俺に跨ると腰を落としていった。既に濡れそぼった秘裂は易々と肉棒を飲み込んでいく。その途中で何か当たる感触があったが小猫の動きに合わせてゆっくり挿入していく。小猫は自分の中に入ってくる肉棒から目が離せないようだ。やがて根本まで完全に飲み込むと小猫は大きく息を吐いた。

「んっ……これで、全部入りましたか？」

少し苦しそうな表情だが、それでも笑みを浮かべていた。

俺は小猫の問いに答える代わりに下からゆっくりと突き上げた。

「ひゃうんー！」

突然のことに驚いたのか小猫は声を出す。

「さっきやった時よりも大きくなってっんう」

そのまま動きを続けると小猫の声にも変化があった。さつきより締め付けが強くなっている気がする。そのまま上下運動を続けていると、ふいに目の前の小猫の胸に手を伸ばしてしまった。服の上からだと思っていたのだが……

小猫の胸を揉むと同時に小猫の中の締まりが強くなったような気がした。

「んっー… やあ……」

思わず小猫の体を持ち上げて手を放すと小猫はそのまま後ろに倒れこんだ。俺は起き上がるとその勢いのまま小猫に覆いかぶさった。今度は最初から激しく動いたせいで小猫はすぐに果ててしまう。しかし俺は構わず攻め続けた。小猫が気絶しても俺は動きを止めなかった。

何度出したか分からないくらいしたあとでようやく落ち着いたところで、ようやく俺も疲れてきた。

俺は小猫の中から引き抜くと、そのまま隣に横になった。小猫はまだ絶頂の余韻が残っているのか、小さく震えている。

しばらくすると小猫は寝てしまった。

俺は小猫の頭を撫でながら眠りについた。